

扶桑皇統記圖會

前編

一

卷13
2472
1-13



門へ通3
2472
1-13

東京大学

東洋文庫

圖書印
圖書印
圖書印



浪華好華堂主人著編
同柳齋重春先生画圖

扶桑皇統記圖會

前編
全六冊

愛知書肆 松屋書店藏

扶桑皇統記圖會叙

古くは世の 帝、史官を朝廷に置
給ひ。君臣の得失及び治亂興廢を
し、更に遠く開ふ任む人の善惡
を始末し、奇事怪談をその人毎漏きこ
たむは、後世の世に則し、治亂興廢
傳ふ。我故人の世に、美名を一代に傳ふ

扶桑皇統記圖會

前編



地出醴泉
 是順之
 實斯人
 孝順
 皇上盡恤呈彼機
 祥致此祿秩辭在
 易象天祐之吉

孝子
 小佐次

皇統己圖會前第一

四



贊曰
 道德全者
 鬼神不得
 而窺矣
 役君神異
 可謂不測
 者焉

後鬼

前鬼

役
 小角

皇統己圖會前第一

三

贊曰

遊唐國才爽敏
相本朝踰貴職
宮掖允穢斯滌
齊狄梁公奇績

仲磨
亡靈



前右大臣吉備真備

孝謙天皇

帝諱阿閉又曰
高野聖武之
御子母皇
后不比等
之女也嬖
藤原
仲磨
及
道鏡
雖有嬖行之譏
詔令天下家
藏孝經一本明孝道
斯可觀

孝經道鏡



如法女狀
 勝大夫夫
 父為所諧
 祝發入無
 性無世
 樂
 心信浮圓
 化元一偈
 不知返誣



中將姫

皇統記圖會月一第

帝及廢考子
 孫後弗越後
 有右而為右
 宰員外帥
 天平室家八年
 復本官



横佩豐成公

松之

皇統記圖會月一第

扶桑皇統記圖會前編五卷總標目

第一卷

天武天皇御治世
 持統天皇御即位
 草壁王の御野水田江守忍び入の圖
 持統天皇御即位并御詠歌御讓位條
 文武天皇御即位
 役行者開基大嶺
 役行者流罪神衰條
 得前生劍杵事
 官吏討手小向ふ行者雲中飛行の圖
 入寂火葬盤腸の條
 釋道照与龍神鑑
 日本追難起源
 元明天皇御即位
 從武藏國獻始銅條
 從武藏國獻始銅條
 山城國稻荷勸請の事
 從近江獻靈龜條
 平城都遷幸
 元正天皇御即位
 從對馬國始獻銀條
 大津皇子隱謀自殺事

第二卷

金烏玉兔集と得ん為仲磨入唐の詔の圖
 安倍仲磨入唐 安部好根奸計之條
 養老淹涌出
 孝子養老の淹と汲むの圖
 仲磨留學于唐上
 於高樓餓死詠歌の事
 安祿山等小欺りまて仲磨樓上小餓死する圖
 聖武天皇御受禪
 滿月九主從討好根條
 滿月九母の仇安倍好根と討圖
 江南子母錢の事
 仲磨灵鬼于吉備公語旧怨條
 吉備大臣入唐
 吉備公鴻臚館ゆて仲磨が灵小の圖
 唐帝与群臣評議
 吉備大臣与玄東圍碁
 玄東妻諫良人條
 隆昌女隱黒石吉備公仁恕事

皇統記圖會前編

二七

吉備公与玄東棋を圍むの圖

第三卷

吉備公讀野馬臺詩

長谷觀音利益の條

吉備公野馬臺の詩と讀むの圖

和笏初瀬觀音由來

佛坐巖出現事

安祿山謀害吉備公

仲磨靈救吉備公危急條

近江の湖水へ灵木流る來はの圖

隆昌女恩小因て吉備公を救ふ圖

王津島明神勸請

衣通姫人磨傳

長屋王諺死

大伴小與報主仇事

大伴小與乞巧と成て漆部君足と討圖

聖武帝光明子宮御幸

吉備大臣与廣成等帰朝

舍人親王薨去

始痘瘡流行事

僧玄昉乱宮内廣嗣謀叛

廣嗣憤灵殺玄昉條

玄昉筑紫小至て廣嗣が灵小命を隕す圖

第四卷

鑄大佛銅像

良辨僧正の傳

良辨僧正如とれた大鷲小擲の圖

近刃石山寺建立

從奥刃始献黄金條

石山小良辨釣を翁小の圖

聖武天皇崩御

惠美押勝誇君寵事

押勝君の寵小誇て百官有司と謾は圖

感並夢想太后儲浴湯

改鑄新錢條

弓削道鏡朝恩小蒙マ禮讓と瘵する圖

弓削道鏡乱宮中

惠美押勝滅亡の事

新帝決路於瀆所崩

神灵路上救危難忠臣事

道鏡の内命と受清磨と害せん

暴小雷発する圖

光仁天皇御即位

道鏡於配所餓死條

第五卷 上下有

五上

横佩大臣初瀬祈子 中將姫誕生々立條

右大臣東園の桃と愛一花の宴の圖

豊成迎後妻 繼母奸計諷中將姫條 再度奸計中將姫陷巧事

繼母毒計害却實子

繼子と殺さんとて却て實子と毒殺するの圖

松井嘉兵太与國岡謀義 將監苦忠助中將姫

嘉兵太中將姫が讀經と聽て善心ふるの圖

横佩大臣狩獵雲雀山 豊成於山中遇中將姫條

豊成公雲雀山小狩して中將姫小遭るの圖

中將姫於雷麻寺得道 感得蓮曼茶羅條

繼母の怨灵毒蛇とるる姫の化度小より成佛するの圖

五下

通計六十二條總目錄畢

扶桑皇統記圖會前編卷之壹目錄

天武天皇御治世 從對州國始獻銀條

持統天皇御即位 大津皇子隱謀自殺支

草壁王の御所小水田江守忍び入は圖

持統天皇御即位并御詠歌御讓位條

文武天皇御即位 役行者流罪神寢條

役行者開基大嶺 得前世劍杵事

官吏討手小むる行者雲中飛行の圖



釋道照与龍神鑑

日本追儼起源

元明天皇御即位

平城都遷幸

元正天皇御即位

金鳥王免集と得ん為仲磨入唐の詔の圖

安倍仲磨入唐

入寂火葬盃筋の條

文武天皇山崩御

從武藏國獻始銅條

山城國稻荷勸請の支

從近江國獻灵龜條

從近江國獻灵龜條

安倍好根好計の條

目錄終

扶桑皇統記圖會前編卷之壹

浪華 好華堂野亭参考

大正六年一月五日寄 本校出版部 氏贈

天武天皇御治世

從對馬國始獻銀條

夫世界萬國君有さる事なく各政道以建民を治とすも數其

命と革む就中震具聖賢禮樂の國と稱とれも其王の子孫永世相

續とる更能す周八百年小して七ひ漢八百年小して其統絶る況其

より後世亦及で益篡奪相嗣與廢極りか唯吾大日本の皇國乃

万邦亦勝とて神代小 天照皇太神業と創め統と垂のひより以未

人皇亦及ても連綿とて正統と革る更な。実小万代不易の君子國と申

事。然とも國小治乱ある人小疾病有る。皇國と以とも猶治乱無く能

む。抑人皇四代の聖王天武天皇と申奉る先帝天智天皇の御弟皇



始の御名と大海人王とやなり。天性聰明睿智小す。神明と敬ひ佛陀と
 多る。文と重んず武を好まざる。天智帝も天下と治る。吾なる。知食
 皇子大友皇子とて。御弟大海人王と皇太子小と立のひ。然小大友
 皇子、是と嗚のひ倭臣の勸小任せ。御自之の望と起され。叔父大海人親
 王と弒害せんと企のひ。小親王其機と察。疾も吉野へ入せのひて其難と
 避のひ。潜小緒皇子と俱小東國へ下向す。軍勢と召募て都へ攻上りのひ
 大友皇子と御一戦あり。小聖運芽出度京軍戦へ。每小敗績。終小粟津
 乃戦ひ小大友皇子躬剣小伏て亡のひ。親王群臣の七小任せ。人皇四十六代
 の室祚小登のひ阿閉皇女後小地。天皇と以。皇后と。皇子草壁皇子と春宮小
 立のひ。後小四海天皇の聖徳小伏。万民太平と。綱ひ。独九州豊
 後の大伴真鳥の。己が逆威と逞き。おんけ。天位と篡奪せんと。隠

謀と企る。是又官軍と差向られ。一戦小真鳥と伐亡。兵乱頓小鎮ま
 ず。君宸襟を安んず。信仁政を四海小布施。是小依。八
 嶋の外も能治り。靡ぬ。艸木も。戸。御代と。異邦の三韓。小
 も貢物を献り。御即位と賀。仁君の御徳と。國土の祇も
 感。白鳳三年三月對馬國より始て銀を献。是日本小銀
 と産。如。天皇御感。對馬國司大國と小錦下位小任。の
 多の禄と賜り。献る。銀。緒社の神祇小捧。多。日三年始。六月。行
 行。夏越。越の起源。又此御宇小踏歌の。即會始。五節の舞も
 大嘗會の悠紀殿主基殿。此帝より始。皆末代まで。朝家乃
 恒例と。其外緒社の祭。此御代より始。者。朝廷の法度も。品々
 多。定。天皇猶も。天下安全の祈。為。九州坂本。の。知。小大宮乃

社を建曰圓矢橋の浦小八幡宮の社と建和州吉野下市の山中小丹生の社と
 建曰圓平郡の御小立田の社天御柱神又建曰圓廣瀨小廣瀨の社賣
 神と建又佛法をも崇め山城國乙郡郡八坂小五重の大塔と建立あり
 丹後國小成相寺と建立し其の建立し又寺院あり白鳳十三年四月
 文武の百官と召て詔し凡政の要軍事なり然も近年武官の輩逸樂
 小耽りて武備を怠りたるの聞えあり甚し以て冥り以後り武備を怠る者
 親疎の差別あり其職を存け武吏小精た者甲賤たりも撰出して官を授け
 しむと勅し武官の輩大少恐入是より皆兵馬の道と勵む又
 帝八種の尸を定めし二曰真人三曰朝臣四曰宿祢四曰忌寸五曰道師
 六曰臣七曰連八曰稻置以上なり是を稱し来る尸も今度改めて
 等と定めし所なり諸又新禮と定めて諸臣小黒漆の冠と著せし朝服乃

色と定めし淨位以上紅紫正位深紫直位淺紫勳位深緑務位
 淺緑追位深蒲萄色進位淺蒲萄色等なり十五年正月大和國より赤
 丸雉子と献し是亦因り公卿皆太平の祥瑞なりと慶賀しより天子帝
 大少御欣悦し年号と改め朱鳥元年と天下大赦と行れ諸の罪囚と
 免し放し然も六月小天皇御惱み深き春宮女御八中及
 ち大諸皇子公卿も大少狭た医官小妾て良劑を奉しめたりが諸卿評
 議して曰先年妖僧道智真鳥が頼小應り熱田の神宝草薙の御劍を奪
 去んせしと大伴金道彼僧と虜小室劍を禁廷さし上りるより今以て大
 内小田置置り熱田明神是と名り崇めりやと帝此義を奏し州
 薙の御劍を換田の社と返し納めり熱田の大官司大少怡先年の賊難小手懲
 して深く神庫小納まり固く錠とせしと守護し

持統天皇御即位 大津皇子隱謀自殺事

宝剣熱田入御すりて後、帝の御怒少、忘せりて体小んえさせり。太子
 子白皇后を首とす。滿朝の人々、頼母、思ひ懐ひ多ふ。八月の末より、又重を
 のひ、医官の良方、寺社の加持祈禱も、其強と奏せむ。九月の首領より、御怒類
 小逼、せりしれ、帝も今斯も、思食皇后と御枕頭、招らせり。朕先帝
 の紹命と奉り、帝位と嗣、菲薄の徳と以て、紫宮の尊たふ安君とす。更十
 五年常小戦、兢ととて、万機の政務過ちまう。人更と恐れ、茲ふ今とて、不
 天數、尽て九泉、赴人とす。太子、いふ、年若と朝政と委ぶ。依て、御身、皆王
 位と嗣、政務と執、臣下と梅育、直と奉曲、成、任け、万民と子の如、恤と賞、ハ
 重、一、野、狂、々、世、安、寧、小、治、り、人、勢、忘、り、り、更、あ、れ、と、御、遺、勅、あ、る、と、
 終、小、朱、鳥、元、年、九、月、中、旬、飛、鳥、宮、お、て、崩、御、な、り、り、御、在、位、十、五、年、宝

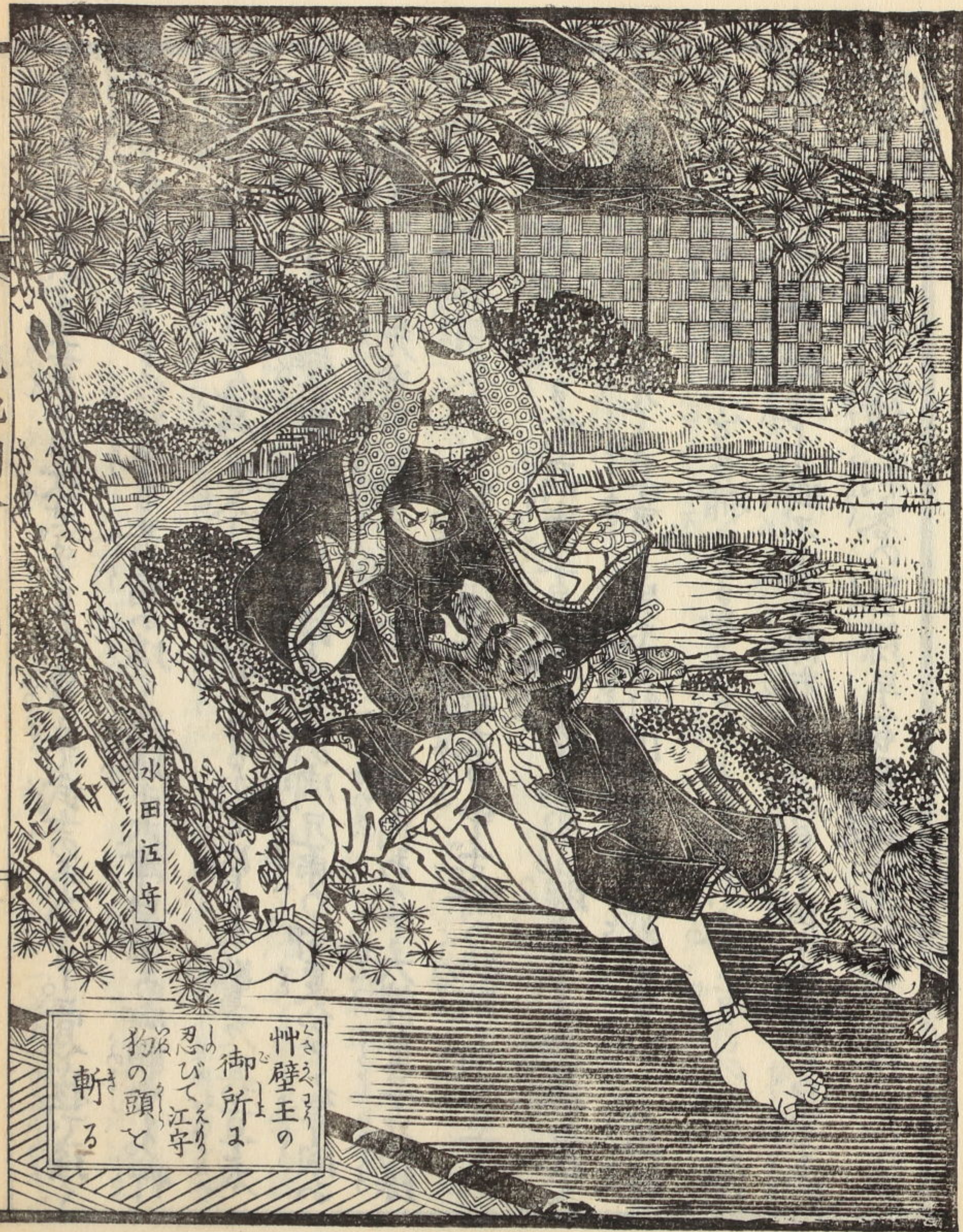
纂六十五歳とて、中、皇后、太子、諸、皇子、月、御、雲、客、緒、司、い、る、迄、深、き
 悲、歎、小、沈、と、れ、も、斯、て、有、果、を、あ、れ、を、尊、嚴、と、收、め、り、御、送、葬、乃、儀
 式を、綱、大、和、國、高、市、郡、檜、隈、の、大、内、の、陵、小、葬、り、り、り、斯、て、滿、朝、の、皇、子、群
 臣、諒、圖、小、管、覽、り、る、が、天、下、一、日、も、君、を、念、心、叶、い、と、御、遺、勅、小、任、せ、白、皇、后、を、四
 十一代、の、帝、位、小、即、ち、り、持、統、天、皇、と、ハ、此、君、が、り、御、諱、ハ、高、天、原、廣、野、姫、天
 智、天、皇、弟、二、の、皇、女、お、て、在、せ、り、也、也、も、諒、圖、の、中、を、れ、御、即、位、の、大、禮、ハ、執、行、れ
 ば、後、小、政、と、預、せ、り、る、が、り、此、君、ハ、女、儀、あ、ら、ず、智、才、衆、小、勝、と、御、心、雄、と
 一、一、壬、申、の、兵、乱、小、先、帝、お、從、ひ、東、國、下、里、の、軍、中、の、更、と、捕、り、更
 多、く、乱、治、り、て、天、武、帝、御、即、位、在、り、後、も、政、と、常、小、捕、り、故、小、先
 帝、宝、祚、と、嗣、命、一、の、御、遺、勅、有、り、也、也、も、此、君、敢、て、帝、位、と、均、す、
 ば、也、也、諒、圖、の、畢、と、待、て、春、宮、草、壁、親、王、小、登、極、と、勸、心、思、食、々、々、小

忽ちつゝた騒動出来たり其根と尋る小草壁親王の別腹の御弟小
 大津皇子とて執りたるが天性才智秀る幼年より学問を好むを御
 成長小順ひ学業進と博識のゆえ高く壬申の乱お亡びひ大友の皇
 子とも御学友あて文と屬り詩と作り大友皇子小劣るむ加之あ
 るが普通の者より強く馬術の達一弓矢物取ても歴々の武士小勝
 りのゆえ先帝も深く其才智を愛しひ御世嗣の太子小たまり
 思召るも小壁皇子八兄と中后腹小生れむ大津皇子と太子小たま
 る夏叶のせむと小壁皇子を太子とまじり大津皇子又帝の御寵愛深を
 以て内心小我と太子小たまる御と空頼て居るひ小草壁皇子(主太子
 の宣旨下りくむ大津望と矢ひひ内不平の思と懐たむ時しも其頃行
 心とい僧ありえ新羅國の産す博学ある上天文と室の術小達せし以

緒人深茂重ん大津皇子も思召所す小平日小行心と招た近親
 く待文の對ふかむひ夏小觸てハ世茂怒る色とあられり行心早
 く白皇子の意中小王位の望ある更と推量り皇子小使ひく曰る君乃御
 相見を見するも大津小貴れ御相あむ更小人臣の相あむと然も今臣下の
 列小加りの六恐るる天の配とる所小背よりり若人臣小下り春秋とあり
 り御短命や或不慮の禍を蒙りて天守に望み白を。是天の配とる
 所小背の故かり先帝小くも聖智の君おて在せと承りひ流石相法小
 疎かり君と春宮小立りるも柔弱多病の小壁皇子と太子小たまひ
 るも心さる智者の二失小く御一生の御過かり飽まる倭弁とふひ阿使れ
 るも心さる船と時と登極の望とす大津皇子行が往結とゆひ
 て大津心動た声を低て仰るる實と先考た世嗣の位小立るとの慶慮す

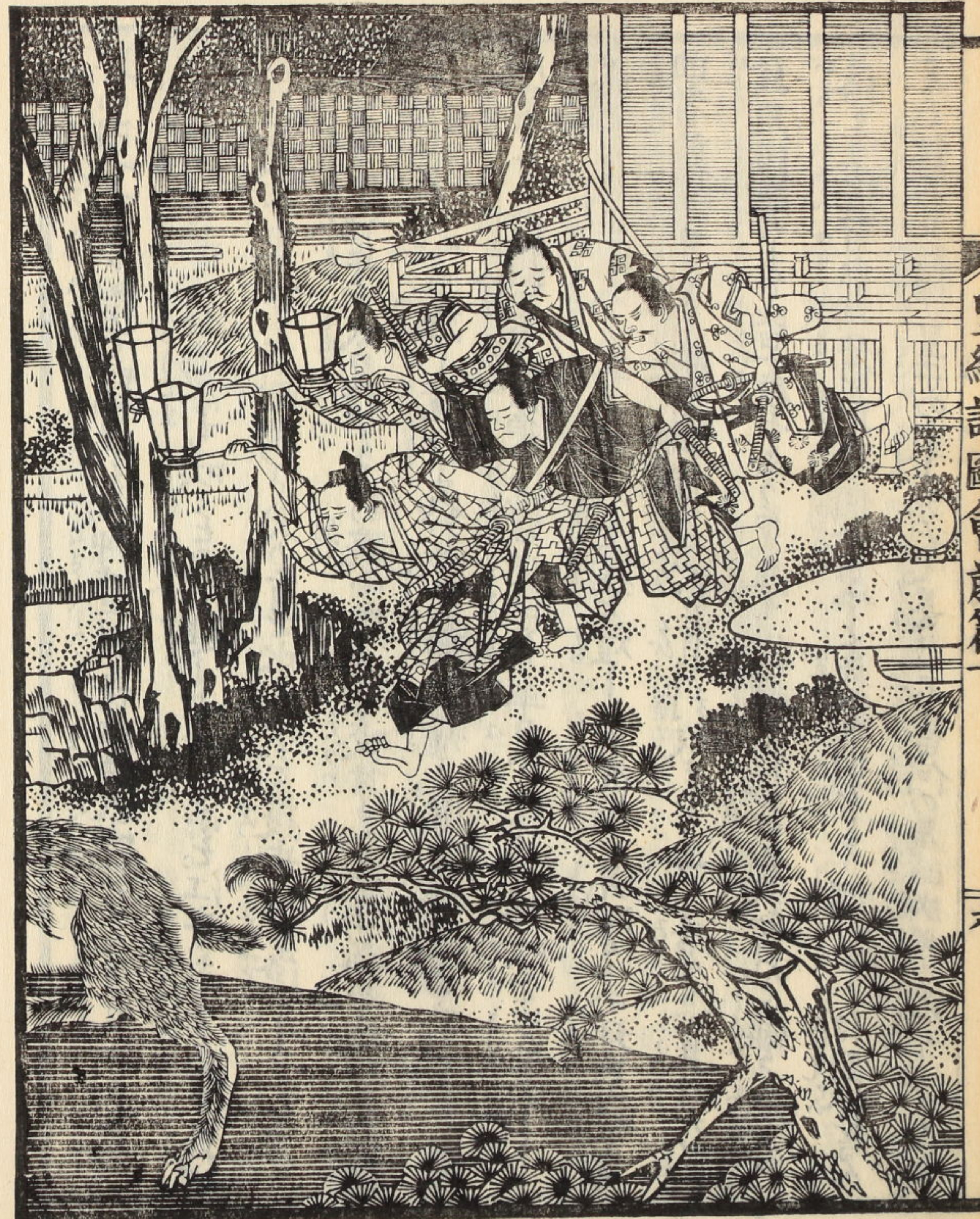
すくも。后腹といひ凡た群臣の奏するも任せし壁親王皇子世嗣の宜直と
 下しむひいふ。敢又帝の御紙あつお唯丸が不運といふおれのと仰るお
 と行心腹を進め。茲を何と大事と思ふる。今先帝崩御し。皇后
 仮小政を國り。御即位ありと。あつおの願てもあつ時なり。此時
 と失ひひいふ。帝位定り後悔胸と。嚙もふも其甲斐いふと。只出る依
 ちろけおぬ。隱謀を勧め進せ。噫利の邦家と覆ると。是等乃
 更と。細か。大津皇子八行心。佞言愈不良の御心暮り。突もと思
 召是より行心。腹心の家臣と集めて。隱謀の密談を。人まれ。艸
 壁親王と害せん。水田江守と忍びの名人。小密針を。合られ。江守
 素り。武術鍛煉の。嗚呼の者。皇子の命。小従ひ。暗夜潜。艸壁皇子乃
 御所。忍び行。大膽。中。堀と兼。起。兼て。案内。ハ。知。つ。地。小。拔。足。して。御。寢。殿。乃

坪の内。小。入。身。潜。て。窺。ひ。多。小。艸。壁。親。王。の。鷹。鳥。大。小。猛。丸。と。号。れ。御。愛。犬
 江守と見て。怪。処。の。忽。ち。吠。と。吼。て。進。より。多。お。江。守。あ。て。ら。者。あ。れ。ハ
 太刀と拔。手。も。ん。せ。と。飛。つ。つ。犬。の。首。と。水。も。溜。と。獲。止。と。お。落。と。多。お。其。首
 吠。つ。つ。江。守。が。太。刀。持。多。二。腕。小。岸。破。と。咬。付。多。江。守。大。小。猛。丸。急。小。搜
 手。捨。へ。と。多。お。強。く。嚙。付。た。敢。て。離。れ。痛。骨。小。徴。て。堪。が。と。左。右。と
 同。著。多。内。親。王。の。直。宿。の。近。習。小。猛。丸。が。平。旦。小。變。り。て。啼。吠。を。お。咎。め。と
 益。賊。な。ん。の。潜。入。と。お。や。と。四。五。人。手。燭。と。燈。一。爰。彼。所。と。見。廻。多。小。坪。内。小。怪。き
 曲。者。覆。面。せ。と。腕。小。嚙。付。多。犬。の。首。と。引。放。さ。ん。と。去。て。居。多。と。見。付。大。小
 強。丸。須。驚。と。皆。一。度。お。ま。う。と。忽。ち。搦。捕。た。大。の。首。ハ。お。れ。と。離。れ。地。上。へ
 落。多。近。習。小。江。守。と。取。巻。何。者。也。と。先。覆。面。を。と。燭。と。き。付。面。体。と。見
 と。む。怨。ある。大。津。皇。子。の。家。士。か。れ。甚。不。審。何。の。為。此。御。所。へ。忍。入。と。百



水田正守

竹壁王の
御所
忍びて江戸
物の頭と
斬る



竹壁王の御所

般不糾問（いんせんとん）も言も白状（はくじやう）せざらんを以て武士の手ごと。骨と拉で強（つよ）く
 跨問（かきもん）せられざるもの江戸も苦痛不堪（くるうたふかた）の。遂に大津皇子の御頼（ごたのり）より。艸
 壁親王（かきしん）と弒（ころ）し。もん為忍入（しのびいり）由と白状（はくじやう）する小を。皆うち驚（おどろ）れ其言と太
 子言上（しよんじやう）する。艸壁親王も以の外強（ぐわいじやう）せの御兄弟の御更（ごまがら）おが。等閑（なすかん）の
 らぬ大更（おほし）たれ。先曲者（まきまがら）の嚴（げん）く禁獄（きんごく）させ。御参内（ごさんない）ありて大津皇子陽謀（やうぼう）
 成企（なりき）らる。由奏聞（しよそうもん）志（し）のいれ。皇后も御發（ごはつ）大方（おほほう）あり。時の執政高市王（しやうしやう）此
 義如何（ぎいか）をなれと問（と）ふ。高市王も御兄弟の更（まがら）おが。理（ことわり）う（さ）る大罪（おほつみ）なれ
 ざ。置（お）置（お）ふおあふ。先（ま）召寄（めいよ）て実（まこと）不（まこと）と糾問（きうもん）の（と）奏（そう）の（と）不（まこと）。兩時
 小有司（せうし）の廳（てい）へ大津皇子と召捕（めいと）きる命（いのち）と命（いのち）の。是（こゝろ）不依（よ）て有司（せうし）の武士大津
 皇子の館（たて）と取囲（とりこ）。朝廷（ていてい）より御不審（ごふしん）の條（じょう）有（あ）て急（いそ）召（めい）る。由（よし）入（い）れ。皇子は
 のひく大罪（おほつみ）發（はつ）たのひ借（か）刺客（あせう）の密謀（みつぼう）早（はや）も露頭（ろとう）せしめ。參内（さんない）よりき

辱（おとし）と蒙（かぶ）るんより。躬（みづか）刃（や）伏（ふ）死（し）。のひなれ。后妃山邊皇女（こうひやまのへみみづのひめ）もはく刃（や）り
 貫（つら）れ。殉死（じゆんし）志（し）のひく。依（よ）程（ほど）小館（せうたて）の強動（きやうどう）より。斗（た）り。局（ま）女（に）房（ふ）達（た）は注
 叫（こゝろ）ひ男子（おとこ）の軍（ぐん）大館（おほたて）。火（ひ）やけん征（せい）兵（へい）と平（ひら）定（じやう）と評議（ひやうぎ）區（く）り。決（けつ）せず。云（い）甲（が）斐（ひ）
 多（おほ）族（しゆ）八身（はつみ）と遁（に）ま。周障（しゆじやう）。有司（せうし）の武士（ぶし）小皇子（せうきうじ）御夫婦（ごふうふ）己（おの）小自害（せうじがいはい）志（し）り
 了（し）て。お發（はつ）き。館（たて）へ。近習（きんじゆ）外（が）様（やう）の士（し）下部（しもぶ）の。近（き）入（い）。搦捕（なすとら）有司（せうし）の
 廳（てい）（曳（ひ）入（い））。高市王（たかちやう）大津皇子（おほつし）御夫婦（ごふうふ）自殺（じしか）。のひ。依（よ）て。御内（ごない）の者（もの）も残（のこ）
 ざ。搦捕（なすとら）と。言（い）上（じやう）。高市王（たかちやう）高市王（たかちやう）即（すなは）ち召捕（めいと）。皇子の近習（きんじゆ）と。糾明（きうめい）させらる。
 不（ま）皆（みな）彼（か）僧（そう）行（ぎやう）心（しん）が謀（ぼう）殺（ころ）と勸（すす）め。由（よし）白状（はくじやう）。依（よ）て。緒（いと）方（かた）と尋（たず）な。遂（す）
 小行（せうぎやう）心（しん）も搦捕（なすとら）。是（こゝろ）も嚴（げん）く。跨問（かきもん）せらる。始（はじめ）お。呵責（かせき）度（た）重（おも）て
 遂（す）小明白（せうめい）白状（はくじやう）せ。又（また）行（ぎやう）心（しん）及（およ）び隱謀（いんぼう）。荷擔（かたん）せ。武士水田江守（ぶしづゐだゑし）と俱（とも）以上
 九人死刑（くわににんしやうけい）行（ぎやう）れ。其（その）余（の）者（もの）。御咎（ごとが）か。男女（おとこ）も追放（おひな）。よ。一件（いけん）落（お）落（お）者（もの）。ま。

愚あるる大津皇子眼前大友白皇子の亡ひのいを見おがる。前車の覆る
絨を忘る。妖僧の妄言惑ひより多れ隠謀を企非命の死となり不良の
悪名を残り。のい。更自才成持。の御過おが。惜るるを。御更かりり

持統天皇御即位。是御詠歌御讓位條

皇后万機の政を関り。のいでより。高市王と万事御商議有る。三綱五常の
道と正。普く天下小仁政と布施。のい。鰥寡孤獨乃窮民。小采粟と賜ひ
貧を憐れ。老成恤。のい。ゆるふ。其仁徳異國も。隠れ。二年の春新羅の
聘使来朝して。數々の貢物を獻じ。春平と賀し奉り。多る。皇后御歡あり
あ。と。使者と重く御食應。一種の引出物と賜りて。帰國せ。め。此正月小
始。御杖と。獻。是卯杖の推輿なり。又女の化粧。白粉と用。更。此御宇よ
り。始り。時。其年の七月大子早。と。青稻炎暑の為。小枯凋。農民大

困。其年ハ甚。と。総薄。り。れ。皇后大。小。憂。の。い。是。我。不。德。の。た。と。所。あ。り
と。て。其。年。ハ。民。の。年。貢。と。半。也。也。半。減。お。て。納。む。と。觸。さ。せ。る。と。天下。乃
農民大。小。悦。び。感。涙。を。流。し。て。都。の。方。を。拜。せ。ぬ。か。り。り。多。り。斯。く。三。年。の。夏。の。頃
春宮。艸。壁。皇。子。御。不。例。ふ。り。て。せ。の。い。多。る。医。業。功。を。奏。せ。と。終。小。四。月。下。旬。小
薨。の。の。い。り。御。壽。二。十。八。才。かり。皇后。の。の。群。臣。大。小。歎。き。惜。ま。れ。も。甲。斐
ふ。れ。が。御。送。葬。の。禮。と。重。く。て。葬。を。な。す。る。日。四年。正月。緒。御。送。葬。あり。て。皇
太子。薨。去。し。の。い。て。日。嗣。の。君。す。ま。ま。す。と。皇后。の。御。即位。と。強。て。勸。め。り。多。る
わ。く。已。更。と。得。り。る。と。遂。小。宝。位。小。即。の。い。大。禮。成。行。せ。の。い。多。る。公。卿。百。寮。の
臣。下。大。子。依。ひ。拜。賀。し。て。万。歳。と。唱。る。天皇。の。御。満。足。す。と。天下。小。大。赦。を
行。ひ。の。い。民。の。八。十。才。以上。の。老。人。采。粟。と。賜。り。高。市。王。と。太。上。大。臣。小。任。の。い
朝。政。を。執。せ。り。其。後。天皇。群。臣。と。召。れて。難。と。う。太子。の。立。を。た。と。勅。回。せ。る。小

緒臣下各其身の所縁ある皇子方と勸て評議更ふ一決せざる所小高野
 王より人位階を進み出列位の勸せざる所皆公論小非を現小先太子の
 脚子珂瑠王在せり是こそ王家の脚正統なり此君をさし置余の皇子を
 太子小勸らるる嫡を棄庶と取の僻論なり最天智天皇脚子の大友皇子
 ときたれ脚弟天武天皇小立太子の宣旨と下しゆい大友皇子の天下と治めしむ
 九昔小あさぎと知食賢と奉不肖を捨る聖智あて常例と志し願の本
 成定むる嫡庶の分を明小するより善なりと。理非を正してたまれんを天皇
 食て葛野王の論と理小合りと賞しゆい高市王も確論なりとたまるる小
 と遂小一決して珂瑠王と太子小ど定めりひる斯く朝廷の群臣小俸禄と
 増加しゆい皇女と是より内親王と称を廢れし詔あり又命婦小位を
 授け又官の位小進等の更由此脚宇より始りひるは八年小高市郡小

宮造なりゆいて脚遷都あり是と藤原の宮と号ゆい天皇ある時夏
 ちの樓より十市郡なる香具山とみあゆりゆい白た衣服とより乾
 あれ何ごと女官小問せり今夏之首ゆい彼山の辺の賤の家小更衣
 せんとも衣服と干侍るゆいんとや上られ天皇與たませゆいて
 春まがて夏はまめり白妙の衣さうせり天乃香具山
 と脚製あをたりたる此脚歌万葉集あ入る古今集あ入れり古今
 と吹し釣違へ不審のより人小あも猶尋ひれとべり去程小春と立
 秋と暮る珂瑠太子早十六才小なせゆい天性温順果和小すり又脚
 秀才小て博く和漢の書典小通し神と敬し佛と尊とゆい明君あてせ
 りゆい多れを天皇脚欣悦たりしてはゆい太子(宝位と讓らせゆい脚即位の
 大禮最嚴重小執行ひる是小依て百官百司拜賀して万歳とぞ唱へける

文武天皇御即位

役行者流罪神變條

珂瑠太子已小四十二代の帝位御即位せり是れ文武天皇とすなる御即位
 之真宗豊御父公草壁皇子御母天智帝の皇女なり。持統天皇乃御孫
 てまゝ中世む天皇殊更小鍾意多の藤原淡海公の女宮子媛とす其頃
 天下小雙もれ美人の宮え有るを則ち入内させのひて白皇后とすのひたり。帝余
 御若年おれども智徳兼備し明君なる上高市王是と補佐しなると
 専ら四海小仁政を絶しゆかぬ八嶋の果せども浪風とす万民腹鼓を拍く
 太平とぞ鑑ひたり。帝先帝統小太上天皇の尊号と奉皇の五朝太上天皇
 乃始なり。時小文武天皇御即位二年の夏大旱し。五穀枯れし泉も川
 も水涸れむ万民大困窮したり。帝是と憂ひ歎せし肝不肖の身を
 以て十善の帝位と汚を事と。天神地祇の外めりなかるを。史記小夏禹王

乃世小大旱魃せし高王自ら雨を祈ん新と積で祈雨の檀と。其上へ
 登りて天小向ひ自ら罪と誓へ若雨を下しゆかんとす所小焼死せんとして己小
 薪小火とすけられまふ心ち大雨降る赤土と潤し民の患いと救ひゆひと
 朕是小做ひ身の罪と松と雨と祈ん詔し禁廷の大庭小檀と殺させて
 天皇沐浴齋戒なりし淨衣と著て檀登りし焼如き交日小照感れ
 り心不乱小雨を祈せしと難有き是小依公卿百官も檀下の四方乃大地
 小平仗り俱小雨とぞ初まらる。斯て帝烟祈まら三小及び高天も
 聖徳と感納しゆひ三日の申刺過より忽ち密雲四方の山より起り
 一天小亮ると比し沛然とて大雨盆と傾るが如降出しる小と帝大始む
 せり。天地四方と拜しゆひて檀と下り宮中入御たりゆひたり。三公九卿及び百
 司百官雀躍して万歳と唱へ勇悦と限り。去程小膏雨降更三日三夜

降通一々六拈ねん稻青いなせとなり其田畠の作物蔓物つるもの田のり池泉いけいずみ
 川がはも水みづ充滿みみくさる小こ緒いと國くにの人民たみ大おほい怡よろこひ是こゝ吾大君わがみの御み恤あはれ也なり斯かく
 甘露あまのつゆ不な等られ雨降あめふり我徒わがた乃なり飢渴うげと救すけひりまと帝德ていとくと感かん拜はいしる勇いさと
 踊おどらざる者もの八やなりと名な其年そのとしの秋あき五穀ごこくも稔あり多おほく万民ばんみん大おほい富とみ多おほく全あく
 帝ていの御德みとく小こより処ところなり月三年つきさんねん役やくの小角せうかくと有あり髪かみの驗けん者もの伊豆國いづのみくに流刑りゅうけい
 小こちんちん抑おさめ役やく小角せうかくと大和國やまとくに葛城かつらぎ上かみの郡ぐん第原たひげん郷ごうの産うぶ中なかつ父ちちを
 役公やくこう氏しと呼よび入いり皇みかど三十五代さんじゅうごだい舒明しゆめい天皇てんかう五年ごねん癸みづ巳のひ三月みづのしづ役公やくこう氏しの妻つま天あまより乃なり
 独股どくこ并降ならて申まを入いり夢ゆめ々々々々妊み娠ごん十月じゅうがつ迄いたり六月ろくがつ甲午かみの春はる正月しづ元日げんじつ
 一男子ひとこと生うり面貌おほ異い相あひあり形かたち魁けい悟ご小こ頗おほる尋常じんじょうの赤子せきしと異ことあり各おの
 然しか小角せうかくと号なづて音ね小こ幼少ようせうの時ときより自余よそのの小兒せうにと遊あそ戯びを好このむと只ただ山林さんりん小
 入いり獨遊どくゆうなり十三才じゅうさんさい小こ乃なり頂たか維い小こ学がくともかく密ひそ乘まと感かん悟ごし能よ孔くわん雀せき明めい王わう

の兎う不動ふどうの真言まごんと持た誦じゆし雨あめ中なかつ小笠こがさを被かざれも衣服いふくと沾しまず常じょう小行せうぎやう
 歩あむも小足せうそく跡あとを履はいて春はる蝨し虫むしと踏ふむと藤ふぢと編あみこ衣えと食くと佛ぶつ
 道みちを煉れん修しゆし十七才じゅうしちさい小こ河洲かす金剛山こんかうざん登のぼり修行しゆぎやうくも一日いちにち洞どう小こ微妙めいぼうの声こゑ
 あると中なかつて溪たにへ入いり下くだり不期ふき法ぽう起き菩薩ぼさつ小こ拜謁はいてつし菩薩ぼさつの説法せっぽうと聴きゆん
 して三昧さんまいと獲と得とり山やま上かみ小こ一字いちじの草堂そうどうと建たて法ぽう起き菩薩ぼさつの尊像そんざうと刻きり
 安置あんちし金剛山こんかうざん小笠こがさ電でん任にんし凡おほ十年じゅうねん齊明せいめい天皇てんかう四年ごねん戊午ぶご小角せうかく二十五才にじゅうごさい小こ及および
 金剛山こんかうざんを出でり撰せん別べつ小こなり三月十七日しづのしちにち其その面おもて山やま登のぼり洞どうの流ながれはり深ふかく入い
 尋行じんぎやう小こ三重さんじゆうの瀧たきあり最上さいじやうの滝たき高たかく二十丈にじゅうさう是こゝ雄滝ゆうたきなり第二だいに瓊じゆう瑠る乃なり
 滝たき小こし岸がし石いし飛ひ泉いづみ玉たまと串くわ々々となり因より瓊じゆう瑠るの滝たきと号なづく第三だいに雌め滝たき
 かり高たかく十五丈じゅうごさう余あま完かんも布ぬと曝ひせり如ごとく頂上ちやうじやうの滝たき壺か小こ龍りゆう柵さくり其その長なが三
 丈さう折せり黒雲くろぐもを吐はり雨あめと降ふり今いまも早はや懸けんの年とし此こゝ懸けん乃なり小角せうかく此こゝ滝たき壺かの邊へ

小角菴と結び柵で丹絨を凝して苦行する小角年四月十七日の夜の夢小角
 清壺の底と探知を思ひ淵の中へ飛入底深く水を却り水が一座の城
 廓有て石門と鎖し小角心何人の柵やと少時停きて内の動靜を中
 幽小技樂の韻をえり依て不動の真言と誦する更數百遍小角は頃忽ち
 門内小角あつて回て曰門外小真言と誦する小角答て我は甘白城の役
 の小角なり然り人々維を門内より答て我は是德善大王なりと即門を閉て
 小角と清り入奥へ伴ひ行ふ重門高く樓閣豊たを櫓と懸り悉く七室を
 鏤て莊嚴し金の莖珠の櫛心も幻り及んば室池小優蓋羅華拘物頭
 華咲もて妙香馥郁と芳王琪樹列異艸生西合和雅の音と鼓と
 妙法を嘯り室幢幡蓋薰風小飄り摩尼の燈明小閃燿と光る甘露
 醍醐の飯食寶器小盛陳り諸殿前小丈餘の錫杖と立正面毎小丈余

の鼓聲と懸り皆刻限到きて揮筆が己と微妙の音と幾度殿
 中小龍猛菩薩坐し左右十五位の金剛童子圍造せり又中央の宮
 殿の裡小七室莊嚴の床あり其上小龍樹菩薩辨才天女儼然と坐
 し時小德善大王佛前の香水と執て小角の頂小灑ぎ頂と撫て曰你
 本所小還リカの及ぶ限意小任せ難山切所を開け佛場と成と有れば
 小角謹んで領掌し九拜して退れ出水上へ浮上り小角愕然とて夢さ
 り小角大い歡喜しそれより滝の下の西の側から荊棘を刈り山石を
 平げ草の堂と建等身の龍樹菩薩辨才天女の像と造り
 同年十月十七日紅葉と折薪と糖て肉眼供養して安置し又德善大王十
 五の金剛童子等の像も造り護法神と堂の東北の隅小小祠を建て
 安置し然り昼の滝の上にて孔雀明王の咒と誦し夜の滝の下にて不動の咒

と彌山の蒼洞の水を供し三時の閑伽憺息を三密の觀行の神心を凝し煉行
苦修するを更二十年是功德小依て於伽羅制多迦の三童子まつく昼糸
給仕し又前鬼後鬼と山神常小事て薪水と採りて小角神妻奇特
寤りたり能空と歩く水と踏で滌り人の吉凶禍福を未前察し。疫病有
者、鬼符とよぶる小奇病難病を治せむと更なり。是小因て世人小角と活
佛のく敬ひ尊び神妻大菩薩とと稱しける

役行者用基大嶺 得前生劍杵事

其后天智天皇六年乙卯小角二十才ふて和州大嶺と閑て勤修し或
日峻峻峯のふ登々る小個の骸骨あり五體分散と長九尺五寸余て左
の手小独股杵と握り右の手小利劍と持て仰み臥り其融體の眼中より樹
木生出り小角是と見て其劍と杵と取んとせむも更取更能と小角

甚と怪と不動明王小祈誓願く彼劍杵と取得さるるを丹誠と凝
して祈り不動の真言と誦して是と暮されたる小頻小睡明く不覺山巖
小倚りて眠るる小不動明王出現し小生曰く彼骸骨は汝の前
生此山小煉修して死しる所の遺骨なり持する劍杵と得人とめ六千手
陀羅尼三十遍般若心經百卷續誦し然と取ると止むと思ふ夢あり
り小角歡喜し夢想のく千手陀羅尼般若心經と續誦して後劍杵
と取ふ果して骸骨自ら手と閑て劍杵と授たり小角是と得て大不怡
び生涯身と離さず所持せり。諸大峯より紀州熊野通る路を踏閑
た三十八才ありて吉野の金峯山小登りて修行し心と煉更數十年小及び持
統天皇九年丙申六十三才己小年老て葛城の嶺より金峯山へく路峻
くして稍行悩まれ諸方の山神と驅集。你小葛城より金峯山へく路峻

岩橋を造れよと命せられり。山神亦命小從の岩石を運び岩橋を造る
 準備せり。多言王の言を以て神ありて其形容甚だ醜くも。昼出る
 夜恥緒の山神小告て自休む。夜母橋を造り。是亦因て岩橋の成就
 する。更最遅り。小角怒りて山神亦召集。何れ何れ橋を造る。解
 忘やと責叱る。山神亦曰言主神自出。更之厭ひ我徒小告て夜の橋を
 造るんとする。更橋の成就する。更遅く。小角大い嗔り。一言主を
 呼出。神兄を以て両腕縛り。則ち誓て。自將來我小等。修験の力ある者
 省む。汝が此縛索を解得せむ。若我小ひく。我者毎人を五十六億七千万
 歳の後。弥勒出世の時。我解得せむ。とて。遙の谷底へ。投せられ。今。金
 剛山の東。小言主の洞と云ふ所あり。されを歌ゆ。
 いろせん。奈の岩。申絶ぬ。明る。びり。き。葛城の神。

とよみて申絶る。戀の本歌とせん。神通力ある行者。あれを。金峯山。末世
 乃衆生。利益。まき。本尊と造り安置せんと。三世諸佛。祈念し。一七日。間。昼
 夜。怠り。心経を續編。祈られ。多小。七日。満。暁。地獄。菩薩。出現。のひ
 小角。曰。箇。様。か。柔。鞭。の。相。ひ。て。未。世。欲。惡。の。衆。生。と。化。度。去。る。更。能。ひ。ず。
 と。捉。て。遙。小。擲。られ。地。獄。善。薩。即。ち。伯。耆。の。大。山。飛。行。の。ひ。と。云。或
 吉野の。投。地。獄。の。六。是。なり。も。縋。り。其。後。一。七。日。心。経。を。編。て。祈。られ。け
 る。七。日。月。の。曉。彌。勒。菩。薩。出。現。し。是。も。是。も。又。小。角。の。意。合。さ。れ。て。劍。を。以。て
 亦。耕。三。度。目。の。眼。と。瞠。り。齒。と。切。て。三。行。一。七。日。間。心。経。を。編。て。祈。られ。七
 日。満。暁。小。金。剛。藏。王。出。現。し。其。相。格。色。青。く。忿。怒。の。面。恐。ろ。左。手。小
 劍。印。と。結。ん。で。腰。と。托。へ。右。手。小。三。股。拵。と。把。て。三。更。り。小。角。大。小。怡。び。是。を。末。世。の
 濁。惡。の。凡。夫。を。化。度。去。る。人。尊。乃。尊。乃。と。托。拵。木。と。以。て。等。身。の。金。剛。藏。王。の

像を刻み金峯山の釈迦窟小堂にて安置しめり。如斯勇猛の行者も時の不肖の免れ更難く不虞災難を出来小く其故和州の住人小従五位下韓國連廣足と云者有て小角が神変奇特あるを以て其門人と云い道に修行する小其勤行の行作甚く嚴密ありて堪がうりぬ廣足稍心倦て修行を懈怠多くと小角大に叱り散く小言辱めぬ廣足亦面を退れ帰り多う心中深く小角を怨む都へ上り朝廷へ出役小角と云者邪術を行ひ愚民を惑し財物を貪り取りと天逆小縁奏去れ朝廷の諸臣小角の徳を去す廣足が縁言を信し帝へ惡言多小奏聞し多小角其者と召捕せよと詔去りぬ是小依て公卿武士小命し葛城なる小角捕へ馳向ひ召捕て奉りしと令し之れ武士も領掌して葛城山より小角小對面し當今汝小脚不審の義申す事回急た都へ參りて言をれ小角敢

て命小應せざと我王の臣玉の民小あむを世捨人ぬれ都へ召るる小角を以て自着して起され武士大に怒り普天之下王土小非る更行々卒士の賞王の民小那むと縋吏あ入や今此山も王の國土なり此山小柵を即ち王の民あむととと難く小角嘲らむ此土王の國あるを去命しとて忽ち虚空へ飛り空中小端坐して坐する小と武士も憫果捕捕と能く手て空してあむ居る許なり小角是を見微笑し頓て雲を踏んで行方去すありぬれ武士小案相違し如何と云れと商議する小一人の者進て出我彼小角一人の老母あり小角生得孝心存く諸國を往歴するも折れ歸て母を孝養するをこれ彼老母を捉て都へ歸りまむ小角母を慕ひて都へ上り薄小就ありと云小と衆士笑も此策妙なりとて第原の郷へ馳行小角の母は余を捉へ駕小乘て都へ上りたる案のてく役行者母と人質小とれ力なく都へ上りぬ朝廷へ

名告て出縛索小就いでのまら以つ久あひ間ら老母らと免ゆる一ひと願ねがれは即すまち願ねがひ小任ま
 せ老母らと免ゆるて古御こみへ入いまれ借かこと小角せうかくと伊豆いづの大嶋おほしまへ流罪りゆうざい小行せうぎやう
 されはなりは也なりも神通しんづう自在じざいと得えりは行者ぎやうぎやうたれは其その大嶋おほしまの配所はいしょ小
 居ゐりはもも夜よるにに起行おこぎやうと古御こみへ入いり老母らと孝かう兼けん一ひと或あるは富ふ士し筑羽つくはと
 ちちめ所有しゆりゆう雞山けいざん切所きりしょ小遊せうゆう行ぎやうと道みちに修しゆ一ひと更い以前いぜん小易せうえきららざりを
 廣足ひろあし又また心こころ小想せうかうらら彼か小角せうかく咽のどの掟おきてと犯おせはりはも罪つみままば遂つひに赦免しやくめんと家
 リ我身わがみ小後せうご難がたと及およびは不如よ公こうの手てと借かりはては誅ちゆうせんはふとと又また高市王たかちうおうへ
 送おくりはと曰いはくは役やく小角せうかく流罪りゆうざい小行せうぎやうと忍しのびは配所はいしょに帝ていと兎う咀そなる由よし
 其その中なにに早はやく誅ちゆう一ひと必かならずは天下てんかの害がむとと告つぐはもも依よて
 高市王たかちうおうと此こゝ傳言でんごん小惑せうかくとと其その年ねん十月じゅうがつ廿にじゅう五ご日にち武ぶ士しと伊豆いづの大嶋おほしま下くだりは小
 角かくが罪つみと弘明こうめい一ひと帝ていと綱つな伏ふしはなる更また緘せめはる誅ちゆう戮りやくとと命めいせしと

る然しか小廣足せうひろあし武ぶ士し小賄賂まわいりやくと贈たまりは自他じたも小角せうかくと誅ちゆうとと之その中なにに斬ころぐは武ぶ士し心こころ得え
 て大嶋おほしま下くだりは一ひと鷹たかの丸まる向むかひは及およびは小角せうかくと更また出で新罪しんざいとと勅命ていめいへへ偽いつはり華はなの
 宣命せんめいと續つづきはせしるは行者ぎやうぎやう少すくも恐おそるは色いろにに敷皮しきひの上うへ端坐たんざしは手て小大日せうたいにちの印いんを
 結むすひは果は不動ふどうの真言まごんと唱となりは自若じじやくととおおりはもも太刀取たちとりの武ぶ士し其その後あと回まわりは太刀たちと揚あげ
 首くびと下くだりは斬ころ小恰せうせつも盤石ばんせきと切きりは太刀たち二に段だん小折せつ役者やくしや安やす然しかとと太刀取たちとり是こゝも太
 刀たちの悪あくににおおみみんと太刀たちを取とりは再またびは斬ころりは声こゑと斬ころりは又また三さん段だん小折せつて行者ぎやうぎやうは
 悠ゆるぎはらは右合みぎあひ武ぶ士しも憫あはれはては化くわせはりは其その時とき行者ぎやうぎやう徐じゆ小後せうごと願ねがひは先まにに續つづ
 宣命せんめい小帝せうていと兎う咀そしはも罪つみ不ふ依よて死罪しづい小行せうぎやうとあれは我われ曾まては帝ていと兎う咀そせし更
 かりは修しゆとと所ところ天下てんか安全あんぜんの祈いのりののかりは然しか小休せうきゆ罪つみかは我われを誅ちゆうせんはとと是こゝ三さん宝
 乃すなはち大賊おほぞうなりは若わか強かて我われと斬ころりは却かへて綱つな你み木き身み小及およびは且かつ又また宇南うなん三年さんねんの同大
 早はや魁けいとと万草まんそう盡じんくは種たねと亡なしはと仰おほせはもも武ぶ士しも大系おほけい心こころにに殺ころすは行者ぎやうぎやう小罪

成りて都より上り行者の告のひすと奏聞し帝大に驚たれ博士
 と召れりト母の博士是と占て彼人素り罪なく大聖者なり凡人非
 ざるを急ぎ罪を免し尊敬の心を奏聞し多し帝深く御後悔す
 大嶋(勅使)とて行者の流罪を赦免あり都より上り御尊敬せられ彼
 廣足八無科多し聖者と絶害せんと巧く条無道なりとて官を剥領地を没
 収し追放しゆひたり是より役行者の驗徳倍せ高くゆえ飯依さる
 者愈多し行者ハ勅免を得てより憚る所なく天下を往歴し山城國小
 公愛宕山(檜州)小鬼取山(伯耆)大山(筑紫)の長山(加賀)白山(越中)の立山(羽州)
 羽黒山(其)余人の通る難山(高山)然(用)て佛場となりし所(杖)奉さる
 小僧あり其後文武天皇の大宝元年辛巳行者六十八才あり老母と鉄鉢の
 内(小)坐せし見ると携て漢土へ(北)渡りし其終る所とまると(實)本朝の神仙

とハ役の行者と(緇)髪○後年道昭律師入唐て諸所の靈場と面(新)羅寺
 あり法花經を講ぜられ時(仙)客多くなりて(鏡)法を(聽)聞せし其(中)小入
 の神仙(倭)國の(結)びて(道)昭と(經)鏡と(議)論し(る)なり(道)昭(怪)し我(本)國の(結)
 小通(り)の(脚)身(ハ)何(人)と(問)ふ(仙)人(答)て(曰)我(ハ)日(本)の(大)行(者)役(の)優(渡)塞(を)
 道(昭)發(た)る(者)ハ(及)び(役)の(小)角(角)在(る)と(高)座(を)下(り)倭(國)乃
 更(に)語(合)て(時)の(稔)る(心)覺(む)其(結)の(中)小(行)者(曰)我(ハ)此(唐)山(へ)來(つ)る(年)月(と)
 送(る)こと(も)三(年)小(一)度(は)必(ず)倭(國)へ(飯)り(金)剛(山)首(城)金(峯)山(富)士(山)等
 小(道)と(煉)修(と)是(日本)の(國)思(ふ)心(を)忘(れ)ず(と)語(り)て(去)り(と)ぞ
 因(り)小(役)の(行)者(唐)山(へ)飛(去)り(後)年(月)迄(大)峯(小)大(蛇)栖(登)山(と)る(金)
 とう(喰)ひ(を)諸(人)恐(て)奉(入)さ(る)者(な)き(も)役(行)者(の)遺(跡)毒(蛇)の(栖)
 と(成)り(御)入(皇)六(十)代(醍)醐(天)皇(の)脚(飯)依(僧)聖(室)僧(正)と(中)八(光)仁(帝)の

官吏の行向役の小角と捕らんとすや雲中を去る性方



役の小角



皇統記圖

皇統記圖

脚孫まご中ちゆう在ある多おほく大おほ勇ゆう猛めうの名な僧そう中ちゆうて。修しゆ験げんの道みちと好このむ役やくの行ぎやう者ぶ乃お跡あとを
 慕あこむ所ところ有ある名山めいざん靈れい地ちと徑けい歴れきしゆしゆの所ところも有ある。然しかし大おほ峯ほう毒どく蛇さ栖すまむ入いる峯
 中ちゆうの者ものあらと中ちゆうのひ。大おほ斧きと持もつて葛くわ苗めうを刈かりむ。大おほ峯ほうへ分わけ登のぼる。亦また果ぐわいて
 大おほ蛇さ出いる僧そう正しやうと云いふ。然しかし亦また三さん室しつ院いん師し少せうも心こころのちと持もつ。大おほ斧きおも毒
 蛇さをすく斬きり殺ころす。ひひ再またび大おほ峯ほうと関せきに熊くま野のへ通とほる路みちをも平ひらげのひひり
 さららふ依よて緒いと人ひとまま大おほ峯ほうへ山さん上じやうまま更さらふと得える。三さん室しつ院いんの符ふ小せう斧きと
 附つく。此こ摺すりたり。修しゆ験げん道だうの行ぎやう者ぶ本ほん山さん流りゆう雷らい山さん流りゆうの二に流りゆうあり。本ほん山さん流りゆう
 八は天てん台たい宗そう中ちゆうて聖せい護ご院いん流りゆう。當たう山さん流りゆう真ま言げん宗そう中ちゆうて醜しゆう三さん室しつ院いん流りゆうを
 聖せい護ご院いん流りゆう八は月げつと峯ほう入にる時とき。三さん室しつ院いん流りゆう八は月げつと峯ほう入にる時ときと亦また夏なつ中ちゆう峯
 入にる。二に流りゆうとも逆さかの峯ほう入にる。〇〇因よて大おほ峯ほうの鐘かね掛かけ絶ぜつ壁へき十じゆ丈ぢやう行ぎやう場
 弟あにの難なん所じよから。往むか昔むかし維いが所じよ為なるともあらず。此こ所ところの鐘かねと掛かけり鐘かねの銘

小こ曰い遠えん江かう國こく佐さ野の郡ぐん原はら田でん村むら長ちやう福ふく寺じ天てん慶けい七しち年ねん六ろく月げつ二に日にちとあり。其その由よし未まと尋たづね
 小こ其その頂ちやう遠えん洲しゆ原はら田でん村むら長ちやう福ふく寺じの門かど前まへ入にる山さん伏ふくあり。身み貪くわんふふと山さん峯ほう入にる
 更さら能のがらしし長ちやう福ふく寺じの任にん僧そう是これと憐あはれて毎まい年ねん路ろ銀ぎんの合あ力りきして峯ほう入にる
 一いめくく其その後のち任にん僧そう年ねん老らうて隱いん居きよ後のち任にん僧そうと譲ゆづりし其その後のち任にん僧そう富とみる
 更さら先さき任にん僧そう倍ばいせり。然しかし亦また怪あやしし彼かの山さん伏ふく敢あて路ろ銀ぎんを借かり偽いつはりて曰い當
 寺じの鐘かねの外の外金きん銀ぎんといい者ものからと具そと亦また依よて山さん伏ふく八は其その年ねん峯ほう入にる更さら能のが
 大おほ峯ほうの絶ぜつ壁へきの巖いはの上の上小せう件けんの鐘かねと掛かけ置おきとて。夫これより其その所ところを鐘
 掛かけと号ごうする。彼かの老らうと山さん伏ふく八は役やくの行ぎやう者ぶの化け身しんなり。此こ外ほか末まつ世せの今いまも追
 役やく行ぎやう者ぶの奇き特とくと現ある。更さら能のがらと神かみ変へん大おほ言げん薩さつと称なづけり。亦また宜よろしく
 釋しやく道だう照しやうと龍りゆう神しん鑑かん入い火くわ葬さう濫らん觴さう之の條じょう

文武天皇四年春三月奈良之真寺の僧道照入寂を仰此道照河内國丹比
 郡の産小て俗姓と船の連と呼又八惠和とて儒業をかり多小道照佛道
 成好も出家して孝徳天皇の白雉四年遣唐使小徒以入唐して晋唐の
 聖場と廻り博識の僧とすて緒経と学び究め長安小くして玄奘三藏
 小錫し其高德博文たると尊敬して徒弟とかり経論の温奥と学びた
 此玄奘三藏とより唐の太宗皇帝の皈依僧也其道德高く曾て大般
 若経の未と唐土へ渡りて致れ天生の路上の千苦万勞と凌り遂小大
 般若経及諸の経と得て帰國せり程の名僧かり多道照が俊才剛紀ある
 と愛し寺中小寄宿をせ教導れれ道照好む所かると宿食と忘れ
 学び緒経の秘決と悉く授り多小を玄奘道照が学業成就せると今六
 古郷へ入る倭國の衆生と化度せよ但一佛教の廣く大いたる変究真へ守

你禅法と以て日本小流布せよと座禪根心の法と口授り多道照大に歡喜
 昼夜座禪工夫小心を煉遂小大悟とる更と得り多小師玄奘の法思と深く
 謝し帰國の辞別を乞ふる小玄奘緒以別離小臨とて佛舍利経論若干片
 授け又一の鐺とよて曰此鐺我西天にてある羅漢より授り持歸て平日小食
 物と煮て啣する小身軀健小たり緒病愈とると更かり真不思議の名
 蓋たり今你小よるたり倭國へ携歸り緒人の病苦と救ひ功德の種と植よ
 とゆれれ道照三度押戴て尊息と謝し遂小袂とふして日本へ入る船
 小便船とて乗頭て大洋へ乗出風小任と船と走らせ多小敷日三船中
 の者多病と得て悩と臥多道照師より授り多鐺致と出粥と煮て
 患病者小喰しむる衆人病頓小治り多皆大に怡び其鐺如何の名
 蓋多れをが奇特のゆと向小道照即ち玄奘が語り趣を語せせよ小

船中の者大い感に絨わたのやう難がた有あるを貴たがひます。其の後は又も數あ日かも
 日本の地も也に成なるを知らずも更もや忽たちに船は大海の上に居まりて一すも動くまなく
 水主揖と取り大に怪して曰く今は順風にはるが船の進まるを何の由もと百艘もなれど
 船の動くまる更も三日三夜も及まらなく船子と先に船中の者大に難がたは是を常に更も
 知らずも皆の面色如く菜心をる小中入上葉不精た者有て卦とも占ふて言ふ
 々と是を龍神需る所有るが更も船を留めたり若其需る物とならば終つ
 小此船と海底小沈めても取入まさず命を換へる案に各所持の品と紙書
 海に投入其沈む物と海に沈めるの事といふと衆人は意を銘し所持の品
 と紙書紀道照も佛舎利経卷鑑の事と道書て二日小海水に投入るが余も
 乃紙書と浮流と只道照が鑑と書紙乃と海底小沈める衆人口を
 揃へ借と龍神脚僧の鑑と欲しまると早く鑑を海に投入ると言ふも道

照敢て止まんがと此鑑龍神小借るが我師より諸人の病を救ふ
 とて賜りくまれ龍神小借るが溜り你個も先に此鑑の徳を病苦
 免れます小あまとと投入るが氣色ならば衆人大に困り仰せ
 さらる更なれど若鑑と惜しむる此船龍神のまらば覆され我徒ハな更も
 かり脚僧も俱に底の水屑とり魚の餌とかりまず鑑を賣り鑑
 かりも何の益もならずに廿二ならば密に我木とも惜しむる更も浪をれど龍
 神の望む上に力を願ふ船中の者の命を助め頭を以て船板と敲き手
 と合して拜し異口は言ふとて止まれ道照も今も辞を遂に鑑と把り
 海中に投入るが最惜むる事なり斯に鑑を海中に小沈める忽ち船動
 れ出る素り帆と上に俟まり船を追風に受てまる更も矢のどり船中
 の者も獲生し心地と恰も限なく道照と佛のどり拜し去程小

海上と行支敷敷目して遂に平戸の浦小着船し久し道照の船と下て和州
奈良へ上り元興寺の内小宇の禪院と建て住し普く禪法を弘通し日本
禪宗の南祖道照あり緒國の僧道照が辰朝と傳ゆ我ちと聚りまき
て後弟とかり禪法世に流布し悟道と名者多し道照も緒國と編歴して
路かれ所ハ路を造り水便せし所ハ池と堀井と穿て耕作の便し又行旅
の乏し橋を掛運送の便小船と造り世に益とる吏古の行基小笠原山背
國宇治橋中道照掛始し所なり道徳の知識あり貴賤とも道照を敬
ひ尊まざるが。當今世も道照と御飯依あり批し内裡へも経論を説
せし御聽聞まじく。然るも道照行年七十二才にして何の悩も吏もあ結
伽杖坐して入寂し。帝甚に悼惜まをの承るも元興寺勅使と
其先と訪るも絹帛手敷ホと賜道照曾て末期小後弟に招れ我入寂後

亡骸と火葬せよと遺言す小依後弟亦遺言す從ひ栗原の野外小於
柴と積茶毘し。るるも五温の形體ハ斤の煙と消ゆれど名ハ後代の書史亦
残りたり。是を本朝火葬の初めたり。

日本追儻起源 文武天皇崩御之事

四年 對馬國より始て金と献りるも帝感斜めを先例小任せ對
馬國司小贈宜賞祿等と賜朝廷の群臣皆其祥瑞と拜賀し。是
小因て年号と大寶元年とかり。以後年号と定式とまきと詔命
し。丸是まで大化白雉白鳳朱鳥ホの年号あり未だ定式たり。或ハ年
号と或ハ年号あり有るも此帝の御宇より定式となり。此以後の帝小年号
あり在るも故小緒書小大寶と以て年号とまき始也と記せし。諸大宰元
年正月元日帝大極殿出御し。御門の正面小鳥形の旗とまきせ宮殿

左の日の御旗及び青龍朱雀の旗と建右の月の御旗及び玄武白虎の旗と
 建さるる後世まで大禮ある節ハ皆此儀式を用ゆる儀とす。是月丁
 巳日大學寮於て始て秋奠の禮成修せられ大聖孔子の像と祭りの抑儒学
 と仁徳天皇の御宇儒書始て吾朝(渡)り直岐王仁を本朝の儒道の祖と
 且ともいふ。秋奠孔廟の義あるも今當今此義と始りてより天下の人民
 儒教と重んじ仁義礼樂の大祖と崇まると知り。誠小儒学の日本を用けし此
 帝ハ御功なり。同年十月太上天皇統三河國(御幸)のひさる小都(遷)御
 乃後勿心ち御不豫ありとせのひれ。帝と首より公卿百官大の孩死医官
 と和漢の良方と先九て御業と献り緒寺緒社ハ御悩平愈の祈念小丹絨と凝
 且又天下ハ大赦を行つて緒の罪囚と赦し放し。百人の僧綱を召れ金光明経
 を續編させれ專ら御平愈と祈らせのひれども。天數満させのひさる也終小

十二月小登霞かりのひさる。太上天皇崩御させの(前)緒臣下(御遺)紹有るハ
 朕死去とも勢を廢し衰小菴る更勿と万常の如くと帝と補佐せよ。葬式
 の更も儉約と旨く。無用の礼式ハ國財と費さず。何更も貨素小(只)野外ハ
 送りて火葬せよと宣ひ置せのひさる。此君ハ前條の中より婦徳と脩めひて
 天武帝と危乱の中ハ佐のひ密祚小即せのひてより神と崇め佛と敬ひ。文を
 勸め武を厲し。臣下と恤み民を憐れ。世と泰平小治めのひ彼唐の則天皇后ハ政
 と專小(淫)樂と恣ふと。純綽と千載小遺せしと。雲壤の遠かる女君ハ在
 今乃天數ハ免との更能と。終小(顔)姑射の山(行)幸なり。もつと悲しと當
 今乃御愁傷ハ申も疎小。滿朝の文武乃臣下悲歎の紅淚小袂と絞らぬとなく
 下万民も赤児の母と表ひしと。號哭する声野小充る。然ども斯て有果(れ)小
 あらされハ御遺勅小任せ葬式の礼を整(れ)鳥の岡小て茶毘しむるなり。是帝

王火葬の始なり。帝ハ諒闇ありてせめての翌年の正月ハ朝拜の儀と廢され親王以下百官百司太上皇の殯宮諸祭りて拜せられたる。太上天皇崩御のハ一更遠く異國にて中々新羅王より使者を以て喪を弔ひしる表曰宣君不幸自去秋疾以今春薨永辭聖朝朕思其蕃君雖居異域至於獲育而允同愛子雖壽命有終人倫大期而自聞此言哀感已甚遣使吊賻

如斯異國の王まで太上天皇の聖徳を慕惜をり。斯て帝ハ倍朝政を正しく申すの緒國(宣使)を遣はれて諸州の智能ある者と稱し奉過失ある者と緘め黜りし是亦依て上下皆學問を勵む行跡を慎むなり。曰三年越中岡小立山権現を勧請を願ふ教興なり帝又詔命して美濃國小岐縣山曾作を開きせり。曰年夏五月帝西殿の樓上よりせめて四方の風景を瞻覽

在りたる小西の天方で五彩の雲變遷とて御覽し甚だ龍顏盛く大いハ愛與のひをれ。君前侍坐公卿皆起て祥瑞とて慶賀しむる。是亦因り則ち改元ありて慶雲元年とす。のハ宮内省の未進を御免有る由と觸さめり。のハ貧民大賑賑の悦ぶ更限あり。然るも其年乃秋の季より冬に至り。都も鄙も疫癘大に流行して家々戸々病臥死する者甚だ多かり。帝是と憐愍のハ冬十二月始て饗の式をなす。後神と饗はせのハ其徳をてや疫病漸次小止あり。是吾朝饗の推興ありて未代ハ朝廷乃恒例として行はる所なり。民間前夜の夜小杜谷樹の枝と門戸小拵と豆と爆て屋内小撒し。鬼兮外福兮内と唱るも此饗の式と損する所ありて最古の行事なり。斯て慶雲四年まで四海太平なり。多し。帝御怒ありて。せと。のハ外脚大吏ハ入るをのハを御母大后の御發馬ハも更なり。皇后皇孫緒

親王諸大臣其他百寮の官人まで大に驚た良医肺肝と確て医療と尽緒社の神宮御怒平愈の祈禱丹絨を勵緒山の碩徳ハ病息即滅の大法秘法小身命と地て祈れども定たる御更也や露をうりも其驗なく慶雲四羊の六月中旬終小雲隱させり御在位十年室筭二十五才と在る嘔悲のうみ此帝ハ堯舜の仁徳も劣らせり神佛と御崇敬深く於て御孝心を漢の文帝も勝るせり御君年かう學と好む經史も通下詩歌も御秀作多射術も能御鍛煉ましく万民と恤むも更母の赤子と慈むましく荒年凶作必も民の貢税を免り流行病ある時ハ人民ハ医業賜ひ孝順の者ハ賞金とあり廉節の士奉用ひひ女官の法を定て刑と輕く博奕を禁とて風俗と正し儒學の道を隆かり弓馬の術を勵り聖君とて世のいふ奈何かれ皇天壽と貸ましく三十九も満せりごとて崩御

させりよと天と怒り地と恨て万民街小泣倒悲哀とる事限かり朝廷ハ人々波あがり尊嚴と推し収り奉御遺勅お任せ先帝と等しく私鳥が岡小て火葬おかりせり斯て後緒御経儀ハ皇子ハいせ御幼雅たれとて先帝の御遺詔と演御母君お帝位と勸めする御母太后固く御辞儀ありまされも緒御強て勸めたりを己妻と得りむと遂に詔のひたり

元明天皇御即位 從武藏國獻始銅條

先帝の御母君御遺詔とや緒大臣の勸め黙止さく御孫皇子の御成長在とすて思召遂小口年秋七月大極殿於て宗祚小即此君を人皇甲三代の帝元明天皇とや奉る即ち天智天皇弟四の皇女小て叶壁皇子の官妃おさせり先帝と生せり持統天皇の御妹かり御緯日本根子天津御代豐國成姫小負河内皇女とやなれり時小密筭四十七才小かせ

其年の八月又近江國あり銅錢を鑄さめり一和銅開珍の錢是なり

因小曰此後淡路の廢帝の御宇小錢を鑄さめり所謂萬年通寶太平元

寶開基勝寶錢是なり又仁明天皇の御宇小鑄さめり一長年大寶なり

又拾芥抄不載一神功開寶承和昌寶錢益神寶貞觀永寶延喜通寶

乾元大寶寬平大寶隆平永寶ホナリ。神功錢ハ稱徳帝の御宇承和錢ハ

仁明帝の御宇饒益貞觀の二錢ハ清和帝の御宇寬平錢ハ宇田帝の御宇隆

平錢ハ村上帝の御宇小鑄之也三才圖會小憲別記小曰吾朝の錢六文和銅

萬年神功隆平乾元の五錢を日本の錢と稱し延喜錢を倭國の錢と稱すと云

日圖會小曰錢を引て日本の錢四品一和銅開珍二神功開寶三萬年通寶

一粟隆平永寶とあり抑錢の形ハ天地ハ象とあり外の圓ハ天なり内の孔の方なり

地なり孔の上下小時の年号と記とて天下小通用と會七が錢神論ハ錢を無足

走と号せり是無足とまの細なり和名小錢を足とよみ婦女脚足と稱さるも

此義小因リ又鶴と鳥の眼小似る以て鶴眼と異名一倭人ハ鶴眼の二字の

字と作と取て鳥目とよみ又銅と青く鑄る以て青銅ともいふ

斯く銀錢銅錢世上通用され大い世の勸通より人民悦び限なく然小奸欲

の者有て已が利を得んと私小錢を鑄て公の錢小混し通用せりめれば天皇此變を

聞召て此義如何有るかと臣下小問ふ小執政舎人親王ヲさるハ此義甚く悪れ變

なり早く停止せり凡錢世上亦多くなる時ハ錢の價賤くなり諸物の價貴

なり人民困窮し小奄。今早く停止せり後代追々私小錢を鑄る族出未

錢の價倍賤くなり物の價亦貴くなり世の亂を引出しハ夫財寶ハ小積貯

る時ハ下上と怨む財寶上亦乏れ時ハ下上と覆りハ者なり天下通用の財と下民の心

任せ小鑄さるハ政道亂し禍害生れ小奄。と奏聞ありたるを天皇実中と思

大旱早して春より夏に至るまで雨降ざりしを緒國の農民早魃困窮する妻
 甚し天皇大不致うせのひ是天より朕が不徳と責め所なりとも緒山の僧細小祈
 雨の法を修せり緒社小幣帛を捧て雨を祈せり御身沐浴齋戒し朝夕
 供御と断せり宮中にて天地を拜し雨を祈せり天神地祇も其御丹誠を
 感ずるひ三日より大雨降出り數日膏雨降りて更緒國も等しく枯乾る
 田畑潤ひ多小を万民勇悦び深く天皇の御仁徳と稱都の方を三拜せぬハ
 けと後小天皇御生貨弱く在る小稍年も老させり朝政を聽し頼り
 思召群臣と儀て皇女氷高内親皇小帝位を讓せり是先帝乃皇子
 いま御幼年をば万機乃政を委せりとの御更かり此氷高内親王とせざるハ
 皇壁皇子の御女を文武天皇の姪君とせり此君も御母天皇とひく
 婦徳を具り寛仁温順の御本性也密作と繕せり内親王數度御國

辞ありをば天皇取て許しをばり多也已更と得るをば遂小御承りしり

元正天皇御即位

從近江國獻並龜條

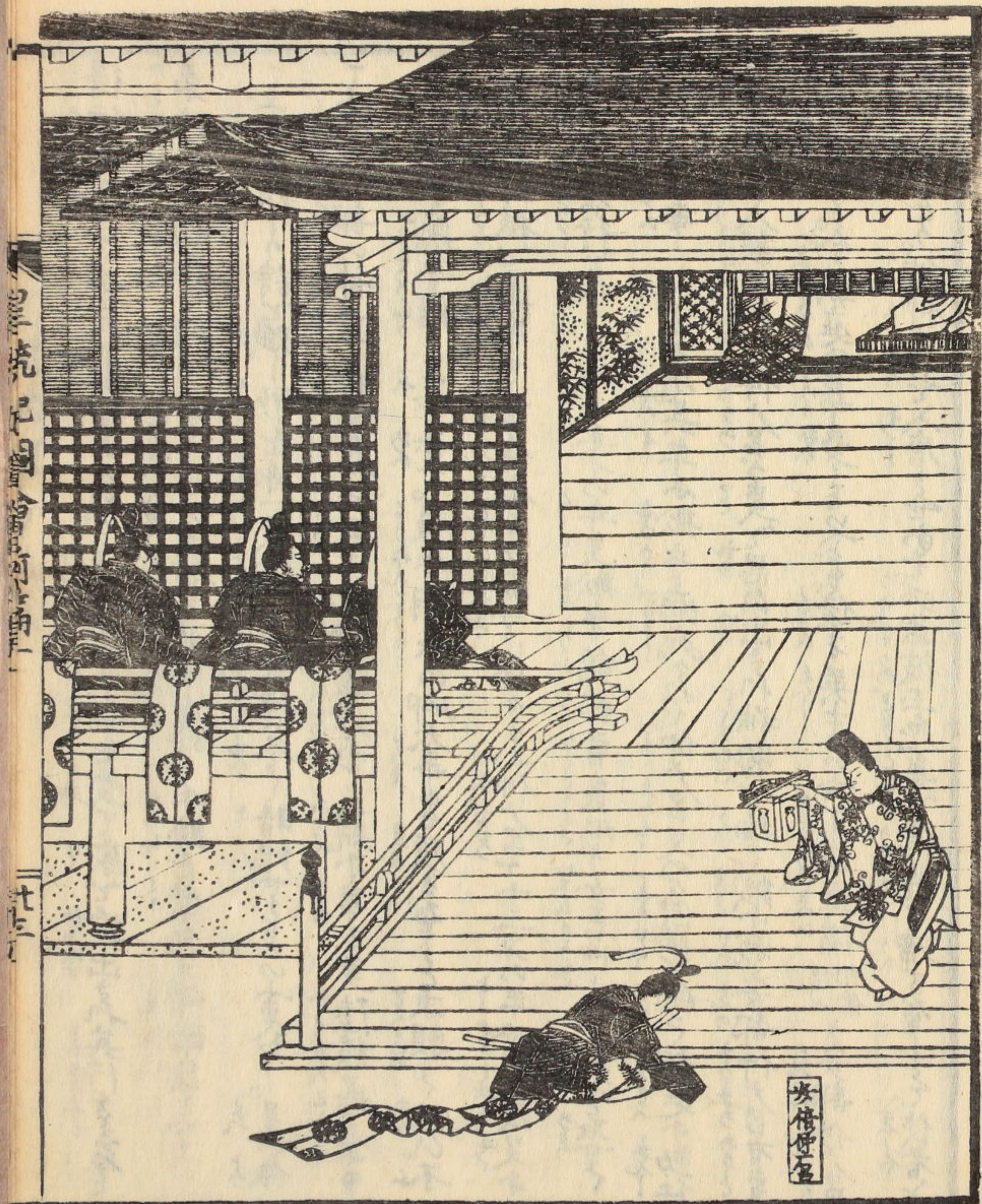
皇女氷高内親王帝位を受嗣りし和銅八年秋八月大極殿小於て御即位
 在り群臣の拜賀と受り此君と人皇十四代元正天皇とせざる御緯日本
 根子高瑞淨足姫又氷高内親王と稱と室葉二十六年小をば色ひける
 即ち先帝毗小太上天皇の尊号と奉りり文武天皇の皇子豊櫻養皇子を
 太子小をば後小聖武天皇とせざる此皇子なり執政小全人親王左右の大
 臣も石上淡海をば万端前朝と更り更り後所ハ八月下旬小江洲淺井
 郡の漁夫亦一甲の龜と携て平城の都へ上り高田首久比古小就て松多ハ
 我徒湖水小て網を曳り所湖の面小雲氣多し更不測小思ひ其所へ網と
 下り曳揚りむ世小珍り龜網小をば小付捉て獻上いとかり久比古首

て龜と受たり。朝廷（敵）り。漁夫ホカヤセ、伏（養）て養（養）聞（聞）しを。天皇緒臣と是を
 觀覽し、亦（亦）実（實）希（希）有（有）の龜也。長（長）七（七）寸（寸）闊（闊）六（六）寸（寸）左（左）眼（眼）白（白）く右（右）眼（眼）赤（赤）し。頸（頸）小（小）三（三）
 台（台）と著（著）し。背（背）小（小）七（七）星（星）と肩（肩）前（前）脚（脚）小（小）離（離）の卦（卦）あり。後（後）脚（脚）亦（亦）大（大）腹（腹）の（の）下（下）赤（赤）白（白）の
 点（点）あり。て八字（八）の象（象）とけり。君（君）を先（先）くし。緒（緒）の公（公）卿（卿）是（是）龜（龜）とて。真（真）の希（希）
 代の（の）聖（聖）龜（龜）とて。感（感）歎（歎）して止（止）む。中（中）の（の）舍（舍）人（人）親（親）王（王）進（進）出（出）て。中（中）の（の）龜（龜）多（多）く。是（是）天（天）より示（示）
 所の（の）吉（吉）瑞（瑞）也。凡（凡）龜（龜）ハ甲（甲）小（小）三（三）極（極）を備（備）て。万（万）年（年）と待（待）とせり。往（往）古（古）中（中）華（華）乃（乃）
 禹（禹）王（王）の代（代）小（小）梁（梁）河（河）より靈（靈）龜（龜）現（現）れ。出（出）甲（甲）小（小）八（八）卦（卦）と負（負）り。是（是）天（天）地（地）定（定）位（位）の（の）後（後）天（天）の（の）易（易）
 字（字）を洛（洛）書（書）と綴（綴）り。後（後）年（年）周（周）の（の）文（文）王（王）伏（伏）犧（犧）氏（氏）の（の）河（河）圖（圖）禹（禹）王（王）の（の）洛（洛）書（書）と合（合）せ考（考）す。
 八（八）卦（卦）の（の）易（易）と著（著）し。周（周）公（公）且（且）六（六）十（十）卦（卦）と定（定）し。天（天）下（下）の（の）易（易）曆（曆）是（是）より起（起）まり。其（其）余（余）靈（靈）
 龜（龜）の（の）賀（賀）瑞（瑞）倭（倭）漢（漢）とも例（例）多（多）し。當（當）今（今）女（女）帝（帝）在（在）せども。聖（聖）德（德）と備（備）り。故（故）御（御）即（即）
 位（位）の始（始）此（此）祥（祥）瑞（瑞）を示（示）し。所（所）ある（る）を。冠（冠）を傾（傾）け。慶（慶）賀（賀）し。奉（奉）られ。る（る）を。

左右の大臣も、ち並居る公卿皆萬歳と唱（賀）瑞と祝し。多（多）る。天皇龍顏殊
 小（小）麗（麗）く。歡（歡）感（感）存（存）し。久（久）比（比）右（右）及（及）左（左）漁（漁）夫（夫）小（小）賞（賞）祿（祿）と賜（賜）ひ。和（和）銅（銅）八（八）年（年）と改（改）て。靈（靈）龜（龜）元（元）年
 とす。の（の）彼（彼）龜（龜）ハ再（再）び湖（湖）水（水）放（放）し。めり。其（其）後（後）天（天）皇（皇）緒（緒）の（の）文（文）宣（宣）武（武）臣（臣）と召（召）れ。く
 勅（勅）詔（詔）し。の（の）以（以）て。朕（朕）不（不）肖（肖）の（の）女（女）身（身）と。以（以）て。十（十）善（善）の（の）寶（寶）位（位）即（即）靈（靈）龜（龜）の（の）祥（祥）瑞（瑞）を。蒙（蒙）る（る）と。し。と
 も。敢（敢）て。不（不）德（德）の（の）身（身）を。應（應）せ。ども。是（是）皇（皇）天（天）朕（朕）小（小）政（政）務（務）と。正（正）し。り。せ。り。ん。の（の）御（御）戒（戒）なる
 也。され。ば。天（天）下（下）泰（泰）平（平）小（小）五（五）穀（穀）成（成）就（就）し。万（万）民（民）豐（豐）饒（饒）あり。吏（吏）と。願（願）り。夫（夫）耕（耕）作（作）ハ。四（四）時（時）寒（寒）暑（暑）
 の（の）遲（遲）速（速）を。考（考）て。耘（耘）り。耕（耕）と。の（の）時（時）と。過（過）る（る）と。善（善）と。と。之（之）を。夫（夫）寒（寒）暑（暑）の（の）遲（遲）速（速）を。撰（撰）み。ハ
 曆（曆）より。善（善）かり。如（如）何（何）ん。吾（吾）國（國）の（の）曆（曆）の（の）善（善）か。万（万）民（民）耘（耘）り。耕（耕）と。の（の）時（時）と。過（過）る（る）と。吏（吏）と。能（能）
 ず。朕（朕）身（身）を。患（患）お。れ。中（中）華（華）の（の）古（古）小（小）做（做）り。万（万）代（代）不（不）易（易）の（の）曆（曆）道（道）と。記（記）し。天（天）下（下）の（の）民（民）小（小）能（能）日（日）月（月）乃（乃）運
 行（行）と。年（年）寒（寒）暑（暑）の（の）遲（遲）速（速）を。考（考）る（る）と。吏（吏）と。得（得）て。種（種）藝（藝）の（の）時（時）と。違（違）さ。り。ん。吏（吏）と。欲（欲）せ。り。最（最）吾
 國（國）古（古）より。曆（曆）と。用（用）る（る）と。も。是（是）漢（漢）朝（朝）の（の）宣（宣）帝（帝）曆（曆）天（天）竺（竺）の（の）宿（宿）曜（曜）曆（曆）等（等）より。吾（吾）國（國）の（の）製（製）小

あす日月の運行の萬國とも易る事有らざるも風土未倚て寒暑異之れを異
 國の曆をては季候の等しくざる事無とも謂く。願く日本曆を製永く萬民耕作
 乃便を得さるる。傳聞唐土の金烏玉免集とて曆を作る法と記す書籍
 有と云其書と借得て吾朝の曆法を起さんと思ふ如何と宣ひしを列位公卿
 紹と奉りて矣難有慮慮多感奉りて又想多る唐土渡り其秘書書を
 借得て歸朝せん事凡庸の者の及所あらず。此御使を奉る人者難多るん
 と列卿口懸黙然とて約を設とる多し。時小舎人親王正時勅て中されたるハ
 誠小難有勅紹わて仁恕曼不勝る事ハ未だ臣彼金烏玉免集の義と租承り及ひ
 彼書本ハ漢主雍州城刑山の白道仙人の天竺より五臺山に登りて大聖文殊菩薩
 薩を拜し。教尊の統のハ所の大集日藏月藏の二經及び宿曜曆等の天文地理乃
 與義と傳受て漢土飯り。伏儀氏の運氣論ホと考合して二卷と著り日月星宿を

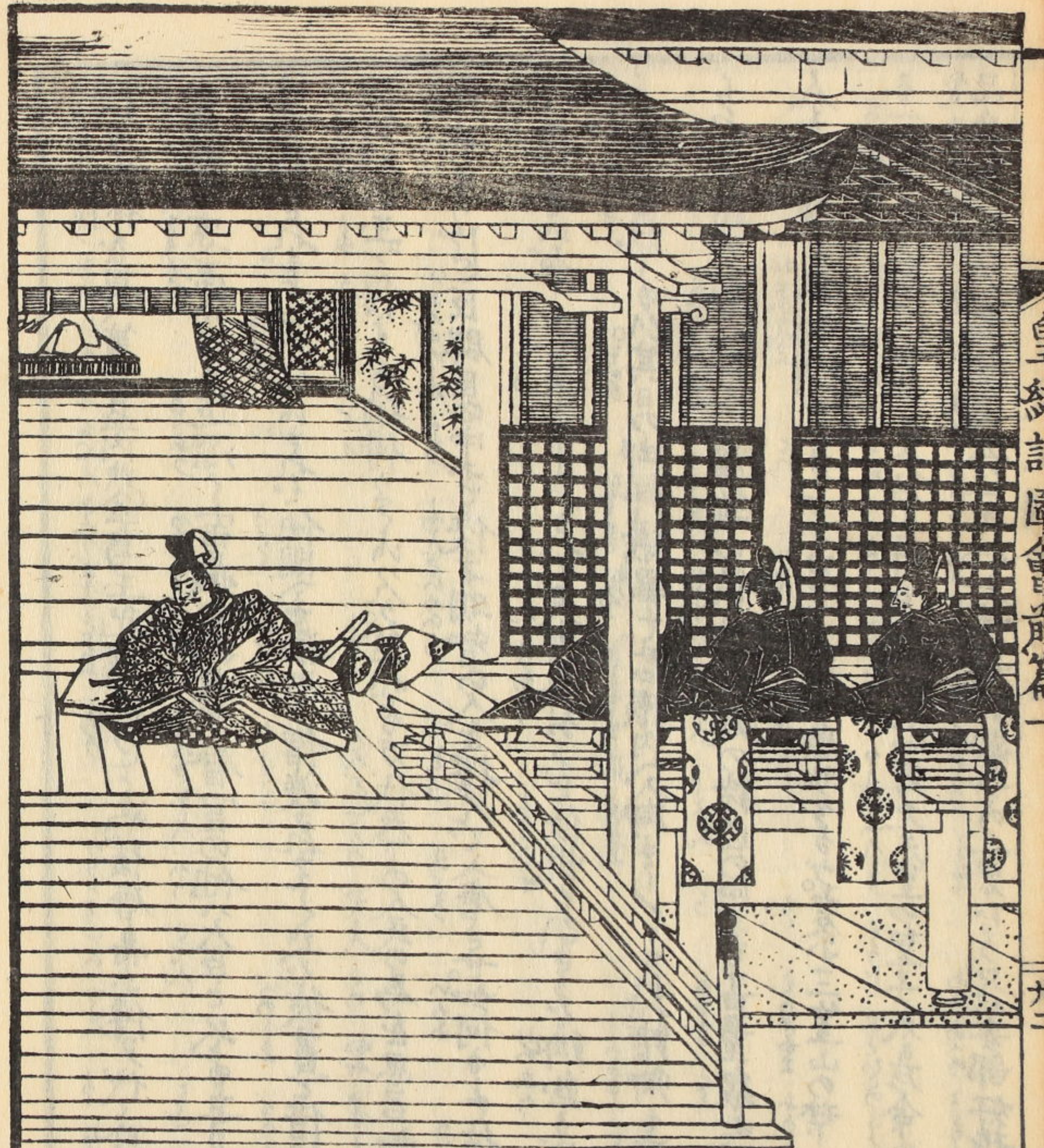
授り知術を具(簾篋益内典金烏玉免集)と号と云。後唐帝の傳り代珍藏して
 當時玄宗帝の御深く密藏秘天学曆官の他大臣と云ふ事ハ未だ聞ざる
 史を終されと承らるる。他國へ猶以て借渡されし。彼書と借得ん事と
 龍の腮の玉を得るも猶得ざるハ。然れども万代天下の人民の爲を思召慮慮も又
 黙止するに臣群臣の中にて俊才明智の人を擇んで入唐させ如何と彼玉免集と
 借得るを以て奏しやされし。天皇斜めと欣悦の心を卿然る事と針
 らる。統の其日の御評議畢て君帳内へ入御し。これ緒卿も皆退出せ
 られり。斯て舎人親王六帰館の後熟朝廷の緒臣の中にて量衆ハ勝る事
 人を見彼と思勸れども。是ごとと思ふ才子も無り。愛小三笠山の林小住居せ
 る一才子あり。名と安部仲名と呼り。其先祖ハ孝天皇の皇子太彦命の末葉一
 品倉橋大呂の裔孫從五位中將大輔安部船守の二男なり。兄ハ安部好根と云生



皇朝詩話卷之四

十一

女侍傳



皇朝詩話卷之四

十二

安倍の
仲磨の
詔
金馬
玉兔
集
需
唐土
人

得行述正とくませだ一ち且かつ不ふ孝こうありまたた又また船守ふねもりのを不ふ與よを受うてた家いへとを追お出だせし其その行ゆき方かたをし
 弟あに仲なかつ之の名な幼こ稚ちの時ときよりも智ち才さい万ばん人にん小こ勝しょう且かつ學がく向むかをよ好このむを千せん跡せきを磨えし又また倭やまと歌うたかも心こころけ
 てし十じゅう才さいの頃よりも詩しと賦一ふ歌かを練度ど積つむを書か経けい六ろく十じゅう暗あん紀ぎせしとの事ことなりなり是こゝに依
 てし緒よ人にん安あん部ぶの神章しやうと稱すを仲なかつ之の名な天てん性せい至し孝こうをて二に親おや小こ事ことを更陸りく績せき吳ご王わうを由
 ちよふふ船ふね守もり深ふかくも是こゝに愛すを後ご年ねん朝あさ家けの御大だい事じを預るをとま頼たのみを思おもひ不
 孝こうの兄好この根ねと追出だせし二に男おとこ仲なかつ之の名なと嗣子しと也とも仲なかつ之の名な十じゅう才さいの年母はは死し没ぼつ又また
 事ことて信孝こう行ぎやうと尽すを十五ごじゅう才さいの年又また船ふね守もり錦きん部ぶ首うぶ良ら形かたちが女若わか州しゅうと之る者と娶むを
 仲なかつ之の妻つまとかりますを其その年ねん小こ船ふね守もり病い死しを仲之の名な又またの名跡あとと嗣子しと朝廷てい小こ勤きん社しゃ
 一いつくも舍しや人にん親おや王わう不ふ斗と仲なかつ之の名な更さらと思ひ出せし独ひとり膝ひざと拍て越我われ安あん部ぶ仲なかつ之の名な有あ吏し
 女むすめと心を今朝あさ廷ていの臣下げと之も俊才さい英えいと之も六下げ道だう真ま備び後ご備び安あん部ぶ仲なかつ之の名な
 而しか不ふ限かぎます彼かの仲なかつ之の名なと入唐たうを必然かならず彼かの王わう免めん集しゅうと借得かりて帰るをと之も使者と之も使者と

以もつて仲之の名なと之を召れし多おほく仲之の名な六む頃ご日にち少すくく不快ふかて家いへ小こ引ひ籠かご朝あさ勤きんと怠りますを
 病い平へい復ふく一いつれハ明めい日にち八はち朝あさ祭まつりと沐浴とせ所ところ小こ忽とつち携政せい舍しや人にん親おや王わう下げ御ご使し者しや
 來きり急に館來きるをと之も之の妻更さら何なに等らうの御用ごと使者しやと之も道と親王わうの御
 館くわんへ参りた舍しや人にん親おや王わう仲なかつ之の名なと客殿きやくへ招入ま御ご對たい面めんありて仰おほせし八はち足あし下げと招き
 と私の要用ようありし當あた今いま新あらた小こ密みつ祚そ小こ即すなはち之の五穀こく成せい就じゅう万ばん民にん豐ほう饒じょうの為日にち本ほん曆りき
 と制衣せと之の人の歡慮こころありし吾われ朝あさ小こ曆りきと作るを元もと書かれし唐たう朝あさ乃すなはち
 帝ていの秘藏ひざう有ある金鳥きん王わう免めん集しゅうと之の曆道だう乃すなはち書と借需せうを思召め彼かの書かと借得かりて飲るを
 乃すなはち深く秘藏ひざうありし珍ちん書しよありし各おの易やす小こ吾われ朝あさ借かりと之も思ひをと之も方便べんを以
 て彼書しよと閱り写り取て歸朝きせし余あ小こ絶たと之も術が是極きよくて難義なんぎの御使しありし
 不ふ尋よ常じょうの者小こて之の妻成せい就じゅうせし更さら覺かく束たつかり故ゆゑ其その使しを任ずをと之も思ひをと之も小

朝廷の臣下の中不足下ゆて此御使と仕逐る者あり。とれ火急の招請せらる。彼
 書と字一取て歸る。誠小難中の難事なれども君の御為國の為を辭退せしむ。字向
 の為と稱して遺唐使の船小舟船して入唐せしむ。仲六君依然として大不
 快の起て拜謝して曰朝廷不智能の人多き中若冠不敏の我らる大切の御使を命
 ずらる。更家の養身面目何更う是れ過い。身不肖なれども勅命を首頂き
 入唐して方便と廻し其王免集と一見仕る者あり。字取まどもたう。方寸小暗記。明朝
 仕り上書記して献上し。とや上る小親王御喜悅有て頼母し。思召めがう
 猶中仲六君が血氣と抑入と足下の強記を予兼て知併あが。異國の帝主の秘書と云
 三千余里の波濤と越る。二大更の御使を身慎之心と少て彼秘書を得る。更と專
 一不し。と仲六君を仲六君完示も矣。貴意安く思召る。素り人命不定なれども
 一彼まで先亡はるとも一念の忠魂亡鬼と感も。王免集と取得君小献上て止し。と

さ中 渾く言々小親王感賞あり。則ち仲六君が將て参内し。金鳥王免集
 と借需る御使が。學士安部仲六君命。則ち召連いと奏聞し。ひえ。天皇の
 兼て仲六君が。大才と聞召及せり。心歡感ましく。數々の御被物と下賜り。首尾と
 彼秘書と借得て。歸朝をき由の宣上とぞ下され。仲六君。庭上小平伏て。倫旨と
 恩賜の品。頂戴し。拜謝して退出し。勇と悦ひ。私邸へと歸り。と
 安部仲六君入唐 安部好根奸計之條
 仲六君が妻若艸。夫と曰。年未て十六才なり。る。小妊娘と。早若田帯と。頂成
 々。時小仲六君。内裡より下。倫旨あり。小君の御賜と。上段小飾り。朝服の。後妻
 小向。小我。今日。棋政殿の館。と。と。何更の御用也。と思。小再難得。身。大慶也。
 其故。當今。万民の為。小日本。曆と。製。小予。付。唐の帝の秘藏。ある。麻目。書。と。需。り
 其。御使。を。我。小命。と。の。彼。如。く。倫。旨。及。び。數。々の。御。被。物。と。賜。り。と。朝。廷。不。賢

集出^り四艘^の大船^帆を揃^てとま^りせ^る時^は是^の靈龜^{二年}六月^{中旬}旬^{なり}且^詔仲^良の舎^兄安部^{好根}父^{の家}と追^出されて^は寄^べた^方も^な所^は不^漂浪^と有^り
 今^般仲^良唐^使と^て唐^使と^て忽^心奸^計を案^出し^て平城^上と^三笠^の
 郎^舎ふ^いと^て門^呼と^とれ^ば難^堂某^原江^守何^公や^と出^てる^ふ思^ふゆ^ゑ
 不^良人^の好^根も^も由^あれ^人の^未だ^も思^ふも^正主^家の^嫡男^あれ^を為^す
 かく^云國^情。借^只今^何の^御来^有今^と回^好根^拜と^慚愧^の色^と銜^ひ
 今^更汝^對する^面目^もあ^れも^我若^氣の^過より^又の^不與^と受^浪に^て緒^固を^徑
 廻^り艱^難の^身不^追ふ^付先^非を^顧後^悔勝^と嘯^も又^とあ^れ又^小謝^不
 與^と免^{され}ま^り思^中小^早も^父船^守死^去有^りと^人傳^ふ大^力と^落存^生
 中^不與^と船^一日^斤時^たり^も孝^親せ^る次^悔と^其銜^か弟^仲良^小た^り
 更^も何^と後^回と^思ひ^て歸^郷の^念と^思断^西國^方の^國司^も身^と寄^し不^斗也

此^度太^宰府^で仲^良面^會身^の先^非と^謝又^の死^行且^何更^還筑^紫逆^下
 下^りと^同小^彼各^で今^般遣^唐使^入唐^有小^付學^問の^為小^船と^願て^入唐^し
 かり^彼上^小留^學と^れを^滞留^何年^{まで}も^時を^定め^ず古^郷小^年若^妻又^を
 江^守以下^召使^の男^女の^もて^暮し^れ留^守至^もた^我兄^今仕^官去^りと^ふゆ^ゆ
 ん^を是^{より}古^郷上^り江^守と^心を^合て^我歸^朝す^道妻^の後^見を^りも^れと^據
 かく^頼也^我も^又の^靈前^でせ^る不^孝の^謝も^せま^られ^ば仲^良頼^を幸^に
 其^約不^應と^て杖^をふ^ち身^を寄^し國^司小^仲良^頼の^由と^結り^暇を^乞て^よる^を
 と^年香^巧ふ^言ふ^は江^守信^しく^思ふ^も否^も言^ふ主^人の^御頼^有義^小い^に
 主^人の^歸朝^の道^御後^見か^むる^御と^多る^小と^好根^仕は^なた^しと^心中^小
 独^笑其^終脚^と魚^と若^州中^名對^面家^内の^者小^飯仗^と各^人と^詳と^寫實^温
 温^泉の^体と^命万^事我^意の^所作^かく^仮初^の小^更を^若州^江守^と南^嶺

皇統記圖會前篇卷之一畢
 二廿七
 さも信ます小このてななれれ若わ艸し江え守しも始は心こ油あぶ断たく好よ根ねが心こ術じゆを疑うひ
 危あやぶなす小こ思しの外が忠ちゆう実じつの行ぎやう跡あとを見みて。備そへ実じつ小こ先せん非ひ改かへめ廉れん直ちゆうの人ひとを成な
 せしああめ斯おてハ函ふ守し中ちゆうの後のち見みと頼たのまれししの如ごとく偽いつはりめししとと思おもはる。此こゝ所ところ
 小こ其その年としも暮くれ近ちかくくる頃ころ若わ艸しハ月つき満みちて平へい産さん一ひと玉たまの如ごとき男おとこ子こなりなり多おほく又また夏なつが
 中ちゆうの悦よろこび勇ゆうと満まん月げつ丸まると号ごう堂だうの平へいと愛あい慈じ心しんと荒あれ風かぜ中ちゆうのあてと守し言ご言ご
 うち其その年としも程ほどの暮くれ明あくと靈れい龜き三さん年ねんの春はるとあり。満まん月げつ丸まるハ追おひ追おひひと愛あい
 らしくある成なる小こ付つ母はは若わ艸しハ早はやく夫おとこ小こ見みせままりく。其その帰き朝あさももと且かつ暮くれ待まち
 これ一日いちにちと送おくるも三さん秋あきと盛さかる想おもひ多おほく好よ根ねハ若わ艸しが衆しゆう小こ勝かちとと艶あや色いろ
 たる小こ魂たまを奪うばはれ我われの国くにの花はなををと頼たのみ戀こ慕ぼの欲よく大おほ胸むねを焦こせせるる
 色いろ小こを露あららす。満まん月げつ丸まると我われ子このこく偽いつはりり愛あい。若わ艸しが心こを悦よろこむむせんとと巧たくまくく
 皇統記圖會前篇卷之一畢

名古屋
 大曾根 矢野平兵衛藏版之内佛書目

宗門無盡燈論	二冊	法華經	八冊	壽量品經	一冊
槐安國語	五冊	同要品	一冊	般若心經	一冊
同骨董稿	二冊	般若理趣分	一冊	同訓讀	一冊
禪門寶訓	二冊	金剛般若波羅蜜經	一冊	諸陀羅尼	一冊
禪林句集	二冊	首楞嚴神咒	一冊	地藏經訓讀	一冊
四部之錄	一冊	三經合本	一冊	御嶽山權現經	一冊
毒語註心經	一冊	觀音普門品	一冊	大道神祇大祓	一冊
碧巖集	十冊	同訓讀	一冊	神道中臣祓	一冊
六祖壇經	一冊	半僧坊大權現經	一冊	同六根祓	一冊

